

文化ボランティア 実践事例集

平成19年度
委嘱事業



目次

■ 色麻町教育委員会	宮城県	3
■ 文化ボランティアステキアート	茨城県	5
■ 特定非営利活動法人 コミュニティアート・ふなばし	千葉県	7
■ 日本書写能力検定委員会	東京都	10
■ にしすがも創造舎	東京都	12
■ 特定非営利活動法人 子ども劇場東京都協議会	東京都	18
■ 特定非営利活動法人 トリトン・アーツ・ネットワーク	東京都	20
■ 特定非営利活動法人 歌い人	神奈川県	22
■ 特定非営利活動法人 横浜シティアートプロモーション	神奈川県	24
■ 財団法人 滋賀県文化振興事業団	滋賀県	26
■ 特定非営利活動法人 大阪アーツアポリア	大阪府	29
■ NPO法人あそび環境Museumアフタフ・バーバン	兵庫県	30
■ 社団法人 岡山県文化連盟	岡山県	34
■ NPO法人 BEPPU PROJECT	大分県	36
■ 特定非営利活動法人 沖縄ハンズオンNPO	沖縄県	39

団体紹介

色麻町教育委員会では、地域文化の振興を図るために、人材育成やボランティアを養成しながら、活動の場を確保し、地域・家庭・学校・行政が連携した協働による「まちづくり」を推進しています。地域の特色ある文化活動を展開するには、教育・福祉・観光に関する団体、

関係機関などと積極的に連携しながら人材の育成に努め、文化芸術活動に関する情報を発信し、地域の文化拠点の活性化と子どもたちの文化芸術活動への支援を行っています。また、「官から民へ」の移行も考慮しながら事業推進に努めています。

趣旨・目的

本事業では、地域における文化資源を活かしながら、新たな人材育成やボランティアを養成するために「町民ミュージカル」を通じて文化芸術活動を実施します。実施に当たっては地域・学校・行政が連携を図り、

ワークショップ等も取り入れながら「地域を元気にしよう！」を合い言葉に、地域住民や子どもたちが文化芸術に対する理解を深めることができるように図ります。

概要

- (1) **舞台芸術体験講座《ミュージカル編》【10回】**
 講師:新田 新一郎・渡辺 理佳・松村 弘美
 場所:色麻町農村環境改善センター・色麻町民体育館
 対象:小人から大人 参加者数:34人
 内容:歌唄指導・振り付け指導・演技指導、ワークショップ等
- (2) **企画制作ボランティア養成講座【5回】**
 講師:新田 新一郎・平山 乾悦
 場所:色麻町農村環境改善センター・色麻町民体育館
 対象:中学生から大人 参加者数:10人
 内容:文化芸術論・脚本制作の基礎・イベントの運営、リハーサル 等
- (3) **舞台制作ボランティア養成講座【5回】**
 講師:安倍 秀和・志賀 圭子
 場所:色麻町農村環境改善センター・色麻町民体育館
 対象:中学生から大人 参加者数:6人
 内容:劇場の仕組みと安全・舞台、道具使い方・舞台制作 等
- (4) **舞台音響ボランティア養成講座【5回】**
 講師:佐藤 典代志・高橋 晃
 場所:色麻町農村環境改善センター・色麻町民体育館
 対象:中学生から大人 参加者数:12人
 内容:音響の基礎・機材操作・音響プラン・オペレート・仕込み 等
- (5) **舞台照明ボランティア養成講座【5回】**
 講師:田中 浩一・田中 万里子
 場所:色麻町農村環境改善センター・色麻町民体育館
 対象:中学生から大人 参加者数:8人
 内容:照明の基礎・機材操作・照明プラン・オペレート・仕込み 等
- (6) **文化フォーラム「地域を元気にしよう！」**
 場所:色麻町農村環境改善センター
 対象:一般町民 参加者数:70人
 内容:公開討論

演題「町民参加型ミュージカルは地域に何をもたらすか？」

コーディネーター:新田 新一郎

パネラー:民族歌舞団ほうねん座 代表 佐藤 正信
 色麻町子ども会育成会 会長 佐藤 忍



結果・成果

本事業を通じて、地域住民が文化ボランティアとして参加しやすい仕組みをつくるため、「地域のことは地域の人が一番よく知っている」との認識に立ち、広範な住民の参画のもとに、住民ミュージカルの企画・運営を進めることができました。また、地域の自然・文化・風土を題材にした脚本や舞台作成が話題となり、多くの観客(540人)が動員できました。



地域文化は、地域で生まれ、育まれ、継承されていくものであり、その主役は住民自身です。文化芸術活動に積極的に参加(文化ボランティアとして)できる場を提供することで、自らが文化の担い手であることに自覚を持ち、人々に元気を与えながら地域全体を活性化し、魅力ある地域づくりが図られることができ、文化の持つ力(「文化力」)が発揮できました。現在は、学校での文化活動へのボランティアの要請も始まりつつあります。



問題点

短期講座で終わるのではなく、長期的な展望に立ったプログラムの開発が必要と感じました。また、文化ボランティアの継続性を維持するには、地域文化の担い手

や文化芸術団体とを結びつける人材(コーディネーター)の養成や、地域住民の要望に応じたハードの整備、財源確保などが問題です。

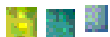
課題

文化振興においては、地域経済、観光、福祉など様々な行政分野間の連携・協力を推進し、地域活性化に努める必要性があります。

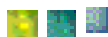
また、長期的な視野からの地域文化振興のための基本方針等を策定し、文化ボランティアの活動の場の確保、登録、条件、支援体制等の整備が今後の課題とされます。

地域住民や文化団体等が文化活動に関する情報交換を行い、行政と文化施策の方向性や役割分担を協議する場を設定するなど、地域の「文化力」を集結するための調整が必要です。

また、地域における文化芸術活動に関する情報や、住民や文化団体が気軽に利用、相談できる仕組みやネットワークづくりも課題です。



文化ボランティア ステキアート



- 主な活動フィールド : 子ども育成、医療、福祉とアートが連帯した地域ボランティア
- 所在地 : 茨城県水戸市

団体紹介

- | | |
|--|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ① 地域文化活動を支える人材の提供 ② 文化活動と地域をつなぐ連携活動 ③ 地域のボランティア活動 ④ ワークショップ、講演会、ツアー等文化を楽しむ機会の提供 | <ul style="list-style-type: none"> ⑤ 地域の人、ものの経験や特質を有効に活用する活動 ⑥ 文化活動の発展を目的とする研究、調査、記録 <p>それぞれがふさわしい立場や出会い方で芸術文化を体験、享受できる社会づくりに努める団体です。</p> |
|--|---|

趣旨・目的

人それぞれが、ふさわしい立場や出会い方で芸術文化を体験、享受して豊かな暮らすための活動を支援する文化ボランティア活動の推進し、地域に不足している支援者、企画者の育成および、場や機会の提供を行うことを目的として活動しています。



概要

(1) 支援ボランティアとなるための基礎的講座、学習

○月例研究会※毎回のテーマ、()内は講師、参加者数

- ・「病院等でのアートや表現活動の活用、その可能性を考える」(坂井知志) 18名
- ・「ユニバーサルデザインを考える」(齊藤良徳) 20名
- ・「ギャラリーリーフの活動を通じてー障害者のワークショップの場作りと理解」(小泉晋弥) 16名
- ・「ワークショップの流れ ファシリテーターの役割」(山本哲士) 17名
- ・「図工の時間でなにをかなえる」(島田裕之) 24名
- ・「ミュージアムのいごこち」(水嶋英治) 14名
- ・「表現のうけとめと気持ちー音楽のフィールドー」(石井恵) 15名
- ・「アートというおまじないというアート」(内山田康) 20名
- ・「精神医療の現場から」(大野建樹) 22名
- ・「幼児、未就学児の表現と対応」(神永直美) 30名
- ・「精神障害とアート活動の支援」(室優子) 11名



○講演会

「ギャラリーTOMの活動から 表現活動支援の意味」岩崎清氏(元こどもの城造形部長、美術教育家)を招き実施。60名参加。障害者・子ども・高齢者等さまざまな人が生活の中でアートと親しみ、活用することについて討議しました。

(2) ワークショップ支援者の育成と場の提供

○ワークショップ<みんなでアート>

支援の仕方を学びながら、実際に、障害者・子ども・家族等にワークショップを行い推進しました。粘土・段ボール・クレヨン・布など身近な材料を用い計14回を実施。(ファシリテーター:山本哲士、安部田奈緒美)

- ・7/22 「クレヨンとボンドで」「大きな紙で」参加者28名 支援体験者6名
- ・8/26 「シールを使って」「絵の具でのびのび」参加者30名 支援体験者4名
- ・9/30 「外でつくって木にかざろう」「ねんどと格闘」参加者26名 支援体験者8名
- ・10/28 「色でかざろう」「ねんどでものがたり」参加者28名 支援体験者6名
- ・11/25 「アイロンであそぶ」「太鼓たたいて絵をかいて」参加者32名 支援体験者5名
- ・12/23 「クリスマスボックス」「段ボールの箱で」参加者35名 支援体験者12名
- ・1/27 「ビデオテープの森」「ワタシものがたり」参加者48名 支援体験者9名

概要(続き)

(3) 地域で楽しみながらアートのボランティア活動を体験

○彫刻洗い隊(野外彫刻の洗浄体験)

水戸観光協会・茨城大学等と協力し、7メートルの水戸黄門像の彫刻を洗浄するワークショップ及び研修会を開催。水戸市内の彫刻等を定期洗浄することなどの計画などが提案されました。

(4) 地域素材、人材の活用と循環

企業の廃棄材料・余材を精神障害者作業所が整理(委託事業)し、子どもたちの造形で活用する試み。廃棄材料で造形に使えるものを精神障害者作業所に整理を業務委託し、それらを実際に子どもたちのワークショップで使いました。

(5) インテグレーションを目的とするアート環境づくり

障害者とアーティスト・美術教育・医療がコラボレーションする展覧会を実施(2回)
精神障害者の若者が個展を2回開催。企画時点から、さまざまな分野が関わり、展示・トーク・ライブなどを行いました。また障害者の状況を医者や精神福祉士がサポートします。

(6) 支援説明パンフレット等の制作

「支援説明パンフレット」等を制作。また、研究会をデジタル記録。

結果・成果

アートに偏るだけでなく、他分野と課題を共有しながら、文化芸術の楽しさ・魅力・必要を伝える一助となったのではないのでしょうか。当該の事業では、医療関係者・保育者・学校教員・学生らが参加し、参加者の感想メモからは「さまざまなフィールドがつながることの必要」「子ども達や障害者を多視点で理解する支援の必要」などが記され、人々の表現活動や思いを支える為の体制や視点の必要などを見出すことができました。



- 例
- ・過疎地域でのワークショップ等による地域おこし(茨城県大子町)、子どものフェスティバルをする上でのワークショップ・芸術の利用、連携(水戸青年会議所)・表現活動をサポートする講座の開講(水戸市)
 - ・養護学校での表現活動のボランティア講習(水戸市他)などの連携事業が始まりました。

また、この事業では、アートと医療、福祉、保育等を積極的につなげ活動や研究を行いました。幼稚園・保育教育とアート、精神障害とアートとのかかわり、地域の美術館・博物館を利用するためのこどもの楽しい鑑賞法と支援について等の地域での研究会が新たに発足する動きなどにもつながりました。

問題点

活動を行うにあたり、マネジメントの確立の必要性を感じました。

- 例
- ・障害者が子どもたちのための材料を整理した際に、その費用等が円滑に収入として得ることのできるシステム作り

- ・障害者等もふくめたインテグレーション的活動においての、個人の情報の開示や知らせ方等についての研究

身近であり、わかりやすい文化活動の展開を目的としていますが、まだアートにおける「文化ボランティア」活動は、一般の人々にとっては、垣根があるように思われます。

課題

人々の表現活動を広範に支援するために、以下のような基盤作りがさらに必要であると感じました。

- 支援者の人数・・・恒常的に地域の表現活動を支援するために必要
- 企画者の育成・・・地域との相談、企画の実施までの推進者の必要
- 資金強化・・・頻繁な広報や新しいアイデア案などを実践するための融通をもてる体力

等

- 平成20年度は、
- ・ベルギー<クレアム>と「ぼくらのいい感じ」展とワークショップの開催(7-8月)
 - ・<みんなでアート>の開催(インテグレーションワークショップ(毎月)
 - ・だれでも楽しめる鑑賞ツールの開発(10月～)
 - ・彫刻洗い隊(年2回)
- 月例研究会(毎月)等を実施し、地域の人々、子どもたちに体験してもらおう文化的享受環境づくり、そして、地域ならではの視点、事情を大事にしながら、文化的環境、体験作りの研究、実践に取り組んでいきます。

特定非営利活動法人

コミュニティアート・ふなばし

■ 主な活動フィールド : コミュニティアートの企画・運営

■ 所在地 : 千葉県船橋市

団体紹介

1997年から千葉県船橋市を主なフィールドに活動するアートNPO団体です。

広く市民を対象に、美術・演劇・ダンス・映像等、コミュニティにおけるさまざまな課題を創造的に解決するアート「コミュニティアート」の企画・運営を行っています。

1997年～2002年に知的障害児との即興ダンスワークショップ実施(計54回)しました。地元商店街との協働によるアートプロジェクト・市民対象のワークショップ・セミナーを多く展開すると同時に、県内および全国

のアートNPOとのネットワークを持ち、地域間交流の推進役を担っています。

また、コミュニティにおける芸術文化活動を支える「地域を活かすアート拠点」について、研究・調査活動を行っています。

平成17年度「文化ボランティア推進モデル事業」受託し、平成17-18年度千葉大学ボランティア実習受け入れ団体、特定非営利活動法人アートNPOリンク正会員団体とし活動しています。

趣旨・目的

本事業は、地域で活動するアートNPOによる、「ネットワーク型文化リーダー育成プロジェクト」です。アートによって地域課題を解決する「コミュニティアート」、アートと地域をつなぐ「アートマネジメント」を中心に、首都に隣接した中心市街地における文化芸術活動を長期的な観点に立って主体的に進めることができる文化ボランティアのコミュニティを形成します。

実施にあたっては、全国ネットワークを最大限活用し、各地の地域文化芸術活動の知恵を船橋市に集結させ、「市民参加型アートとハイアートの垣根」を超える、旧来的なコミュニティと新住民が会う新しい公共の場としての高品質なアートを創出する人材を育成します。

平成17年度文化ボランティア育成モデル事業において実施した「全国アートNPOフォーラム・船橋セッション」、講座「コミュニティアート実践講座」の取り組みをさらに深化させた各プログラムの実施により、船橋市が「市民の手によるアートマネジメント」の情報発信地になります。

本事業は、講座・ワークショップ・シンポジウム等の活動を通して、「新しい公共の場としてのアート」の担い手＝文化ボランティアのコミュニティを形成し、地域における文化芸術活動を支える高いコーディネート力とネットワーク力を持つ「ネットワーク型文化リーダー」の育成を行います。

また、福祉・教育・環境・商業等さまざまなジャンルの組織・団体の持つ文化力を、文化芸術活動の担い手と連携させると同時に、地域で活動するアーティストを広く市民に紹介し、アーティストが地域で育つことができる環境づくりを文化ボランティアが担う体制を整備します。

以上の活動により「市民の手によるアートマネジメント」のスタイルを確立し、地域芸術文化活動における人材育成のモデルを提供することを目的とします。

概要

講座: 船橋FAM学校(2時間*5回)7月～11月 毎月1回実施

会場: ステーキハウス・ヒロキ

第1回「ポタライブのつくりかた」講師: 岸井大輔(POTALIVE)

第2回「アートから地域が見えてくる」講師: 増井真理子増井真理子(アート記念日実行委員会代表)

第3回「地域を活かしたアートについて」講師: 門脇篤(現代美術アーティスト・現代美術)

第4回「地域資源を可視化するデザイン」講師: 朝田尚子(デザイナー)

第5回「船橋市本町通りの50年」講師: 吉野弥生(ステーキハウス・ヒロキ経営)

ワークショップ: ポスターデザインワークショップ(2時間*6回)9月～11月

会場: 船橋市市民活動サポートセンターほか市内各所

講師: 宮部浩司(デザイナー)

第1回オリエンテーション

第2～4回フィールドワーク

第5回トライアル制作

第6回成果発表・相互批評

概要(続き)

ワークショップ:文化資源マップをつくろう!～

「コミュニティ・アート・マップ・ワークショップ」(2時間*8回)9月～12月

会場:船橋市市民活動サポートセンターほか市内各所

講師:朝田尚子(デザイナー)、下山浩一(NPO法人コミュニティアート・ふなばし)

第1回オリエンテーション

第2回まちの魅力スポットとは

第3回～6回フィールドワーク・講師による講評

第7回わたしの魅力スポット発表・相互批評

第8回コミュニティ・アート・マップver.0

ワークショップ:「ワークショップのつくり方」(2時間*4回)

会場:本町四丁目公園ほか

講師:あらら。(アーティスト)

第1回音楽とコミュニケーション

第2回リズム

第3回リズムと動き

第4回ワークショップと構成



ワークショップ:まちと遊ぶ(2時間*9回)

会場:市内各所

講師:岸井大輔(POTALIVE)、大木裕之(映像作家)

岸井WS:第1回「作品」、第2回「観察」、第3回「選択」、第4回「構成A」、第5回「構成B」

大木WS:第1回「オリエンテーション・リサーチ1」、第2回「リサーチ2」、第3回「まちと遊ぶとは?」、第4回「心のシーン」

交流事業:船橋FAM学校特別企画「アートスタッフ円卓会議・拡大版」(1回)8月5日実施

会場:船橋市民ギャラリー

ゲスト講師:山出淳也(特定非営利活動法人BEPPU PROJECT)

交流事業:シンポジウム「協働のアート、共創のまちづくり」(1回)平成20年2月17日

会場:船橋市民ギャラリー

シンポジウム:新井宏輔(早稲田大学)、岡本拓(建築集団A+)、加古貴之(わっふる～Workshop For Life～)

岩淵唯奈、山浦彬仁(コミュニティアート・ふなばし)

モデレーター:下山浩一(NPO法人コミュニティアート・ふなばし理事長)

講座:市民が育てる文化施設(2時間*5回)平成20年2月13日～16日(4回)

会場:船橋市民ギャラリー

講師:Nam HyoJun(アーティスト)、門脇篤(現代美術アーティスト・現代美術)、増井真理子

(アート記念日実行委員会代表)、木下朝美(相模原市民ギャラリー)、

下山浩一(NPO法人コミュニティアート・ふなばし)※委嘱期間外のため、経費は主催者が負担

全プログラムは、コミュニティアート、アートマネジメントに興味を持つ市民を対象に実施しました。SNSや口コミで参加した学生が多かったことが特徴です。

講師はいずれも各地でのアート活動の経験が豊富なプロデューサー、アーティストを厳選しているため、市民参加型の文化芸術活動の自律的な運営のメカニズムについての知見、高品質のアートを生み出すアーティストならではの思考のバックグラウンドを共有する機会となりました。

両者に共通しているのは、自律的な文化芸術活動を長期的な観点に立って主体的に進めるためには、良質なコミュニティの維持が不可欠であるということでした。

文化活動としての成果を現すまでの時間をかけたコミュニケーションが、ボランティアの持つ資質を発揮させる原動力となっているという点が、より明確になったことが本事業の成果の1つです。

ワークショップ「まちとあそぶ」における岸井大輔氏のWS、ワークショップ:文化資源マップをつくろう!「コミュニティ・アート・マップ・ワークショップ」は、参加者の参画ための設計が非常に高度で完成度が高く、文化ボランティアの支援に大いに参考になりました。

結果・成果

本事業の講座・ワークショップ・シンポジウム等の活動を通して、「新しい公共の場としてのアート」の担い手＝文化ボランティアのコミュニティを形成し、地域における文化芸術活動を支える高いコーディネート力とネットワークを持つ「ネットワーク型文化リーダー」の育成を行いました。

事業への参加者のべ124名（うち学生50名）うち13名がコミュニティアート・ふなばしの文化ボランティアとして活動中です。平成20年5月17日（土）船橋市本町通り商店街「きらきら夢ひろば」において「相田ちひろアートワークショップ」の企画・運営に参加しました。

また、地域における文化芸術活動の担い手を、参加型プログラムの実施によって支援し、文化ボランティア活動の一層の環境整備を図りました。

「船橋コミュニティアートマップ」は、ワークショップ参加者全員で船橋市内をフィールドワークし、「文化の担い手によるマップ」として完成させ、商工会議所・商店街からも好評を得ることができました（5000部作成、船橋市市民活動サポートセンター、船橋市本町通り商店街、他各種セミナー等で配布）。文化ボランティアの継続的な

活動の場を他ジャンルのセクターに紹介することができました。マップは若年層や若い家族層に船橋の地域資源を紹介するマップとして活用されています。

交流事業：船橋FAM学校特別企画「アートスタッフ円卓会議・拡大版」では、ゲスト講師として、NPO法人BEPPEU PROJECTの山出淳也氏をお迎えし、文化ボランティア推進モデル事業採択団体間の情報交換も行うことができました。

広報は、SNS「mixi」のコミュニティを最大限に活用することにより、効果的に行うことができました。コミュニティアート・ふなばしでは、2004年よりSNSを活用した活動に力をいれており、有効な運営が難しいSNS活用のノウハウを蓄積してきたことが、本事業の実施に大いに役立ちました。5000人を超える参加者と日常的なコミュニケーションを積み重ねコミュニティを形成したことにより、イベント開催時のみの一方通行のアナウンスメントではなく、時間をかけて事業の内容を効果的に伝えることができました。

問題点

本事業のプログラムは、当初の予定通りの内容で進めることができました。「講座：市民が育てる文化施設」のみ、講師とのスケジュール調整に時間をとり、日程が遅れてしまったことが最大の問題でした。



本事業を効果的に実施するには、継続的に活動する専門家「プログラム・オフィサー」の存在が不可欠であると感じました。コミュニティアート・ふなばしでは、平成17年度文化ボランティア推進モデル事業の経験を踏まえ、スタンドアロンな講座をSNSで補完し広報や講師・講座参加者とのコミュニケーションの支援ツールとして本事業のマネジメント全般に活用しましたが、よりクオリティの高いプログラムを開発し複雑なコミュニティに生きる現代日本の文化ボランティアをコーディネートするためには、単発事業ではない文化ボランティアのプラットフォームを地域に形成していく必要性を強く感じました。

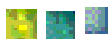
課題

文化ボランティアの育成は、座学では難しいということを実感しました。また、地域で活動するアートボランティアのスキルアップには、1年以上の現場体験が重要とも感じました。

平成17年度、および本年度の実施により地域における文化の担い手とアートの現場をつなぐノウハウを蓄積することができましたが、今後は文化ボランティアが継続的に活動を行い、スキルアップすることができるような数年単位で活動する「地域アートプラットフォーム」をアートNPOがコーディネートを行うことによって整備していくことが重要であるという認識に至りました。

文化ボランティア活動がより発展的な活動となるためには、その主体にあると考えます。地域に密着した文化ボランティア活動になるほど、数年で異動となってしまう行政組織では、地域で活動する文化ボランティアのコーディネートは難しいと言えます。顔と顔が見えるコミュニケーション、地域の事情を熟知したコミュニケーション、多分野のアートにおける知識、ボランティア組織の運営ノウハウ、他地域での実践事例等を踏まえたコーディネーターを育成し、地域アートプラットフォームで活躍していただく基盤整備が急務と考えます。

文化ボランティア推進モデル事業を実施してきた団体を核にした、各地のプラットフォーム形成に公的な支援を行うことが効果的であると考えます。



日本書写能力検定委員会



- 主な活動フィールド : 文字文化の伝承と発展に寄与する為の活動
- 所在地 : 東京都青梅市

団体紹介

国語科の一領域である書写の普及を図り、日本の文字文化振興に貢献するため昭和49年(1974年)、東京青梅市の書写書道団体を母体に創設されました。自らも書塾を運営しながら民間書写教育のカリキュラム、教材、指導法を開発し、仲間の書塾にも提供しています。

120段階を上がっていく検定システムと指導者ライセンス制度が特色です。書写を学ぶ動機付けのため、毎日新聞社と例年5つの書写全国大会を共催しており、出品数は全体で11万点を超えています。平成20年度も5大会とも文科省学びんピック事業に認定されました。

趣旨・目的

日本書写能力検定委員会(書写検)は「教学相長ず」を年来のモットーとして「お友達に教える経験(キャリア)」を重視する活動を継続してきました。いわば「学びあい・教えあい」の重視です。採択事業の教学キャリア

学校版は、この活動を小中学校の正課である国語科書写の授業内で展開し、書写の普及に役立てるとともにお友達への奉仕の心を身に付けてもらうことを狙っています。

概要

教えあいの主役は、書写検の指導者ライセンスを持った小中学校の児童・生徒です。事業のスタート当初は全国にライセンス取得児童生徒は約1000人、在籍校は約300校でした。これらの学校を当初のアプローチ対象としました。

活動の場が学校の正課授業のため学校(学校長、書写担当教員)の理解を得ることが不可欠でした。さらにその前提として普及活動に対して教育委員会の“承認”を得なくては動けない地域も多くありました。折から高校世界史の未履修騒ぎで文部科学省が中学校書写授業の実施調査を行った直後でもあり、学校側の警戒心を解く努力も不可欠でありアプローチに多大なエネルギーを費やしました。

そうした状況下で全国の書写検の仲間教場を動員し、学校への説明に当たりました。書写検本部からも担当者を派遣し、約100校については本部担当者が直接学校訪問しました。その際の説明資料や各地への配布資料に使うため「教学キャリア」ハンドブック(A5判、48ページ)を5,000冊作成しました。書写検では、日本独自の文字である「ひらがな」を大切にしており、子ども達の学びを理解していただけるよう、教学キャリアの取り組みと「ひらがな」のポイントや字源等をまとめ掲載しました。その資料が「とてもよくまとめられている」「とても参考になる」との評価をいただきました。

実際の活動としては、「ミニ先生」として受け入れてもらい、前に出て文字のポイント説明を行ったり、作品を掲示し「どうしたら綺麗に書けるか」等を話す中で、クラスの生徒達に書に対する関心を与えました。

とめ・はね・はらい等説明でわかりづらいところは、実際に書いてみせたり、直接手をとって教えました。さらに、課題や名前の手本(中学生は行書)を書きました。

また、ある中学生は職業体験において隣の小学校で書写の手伝いをする事が決定しました。

訪問を受け入れた小中学校の学校長の多くは、概ね理解を示してくれました。約100校をまわりましたが、8割方は、お友達を手助けすることの大事さ、特技を生かすことの良さのほか児童生徒をほめる機会を得ることができ、有難いと感じていただけたようです。一方、現場教員には実際にどのように展開するか戸惑いの声も多いため、8月の夏休みを利用して「教学キャリア毎日セミナー」を毎日新聞東京本社で開催し現場からの実践報告なども行い、セミナーの報告書を作成し学校、教場に配布しました。

ライセンス取得者を増やすことも急務となり、年間4回の合宿講習会や約150回の全国各地の講習会でライセンス取得を奨励する取り組みを続けました。

結果・成果

学校に、書写検の指導者ライセンスを持った生徒さんの名簿を送り知らせることで、校内の板書・学級目標・学年目標・看板書きからはじまり、賞状書きや送辞・答辞・題字等を書くこととなった生徒さんが大勢いました。自分の特技を活かす中で、(特に引っ込み思案な)子ども達が前に出て自信を持って生き生きとしながらみんなに話しをしていることが何よりも良かったと先生方は話されていました。さらに保護者の方にもその様子をお伝えしたと話されていました。

数値以上に該当校および校区、所管教育委員会に与えたインパクトは大きかったと思います。「私にやらせて」と子供が学校長に申し出て導入が決まった学校も数校あるなど、ボランティア活動が子供たちの関心を呼んだほか、仲間の教場責任者らは「学校に働きかけることの大事さを学んだ」と総括。県教委指導主事から「奨励のためぜひ説明を聞きたい」と申し入れがあるなど教育行政側にも一石を投じたと思います。

問題点

教えあいの行動をボランティア行動とし、賛同する声は多かったです。高校へ内申書に活動暦として記載するとした中学校もあります。

しかし、教室内でのボランティア活動がいじめの対象にならないか、と危惧する声が予想以上に強く、浸透の壁となりました。実際に導入している教室ではそのような事態には全くなっていません。いじめの蔓延とそれに対する学校側の怯えをどう克服するかが課題です。

また、導入校の数値目標は100校でしたが、立ち上がりが大型連休後に遅れたこともあって年間授業計画に組み込めないなどの理由で見送るケースもあり、最終的には20校にとどまりました。しかし、導入の機運が高まっている30校を併せ50校を成功例とカウントしたいです。

課題

実践例を積み重ね、広報して理解を得ていく以外に前進の途はないと考えます。行政・学校・地域と児童生徒・家庭を結ぶ事業なのでそれぞれの展開地域に軸となるコーディネーターが必要ですが、それを自力でそろえる力はありません。地元教場を啓発して地元の団体と提携していく方途をもっと研究し、実現していけばじりじりと進むことができるでしょう。

教学キャリア制度に関しては二十年来の実績をもちますが、学校版は初めての試みでした。学校に対しては教室の先生方も敷居を高く感じており、「私たちはとてもとて行ったり話したりできません。」と控える先生も多々います。そんな中地元協力者会議を開き、一校一校展開されていく情報全体をお伝えし、先生方の背中を押しました。学校側も「まず教育委員会を通してもらってから…」などというところもあり、市長さんのところへ行って、次に教育委員会へ行ってなどと段取りしたところでも時間がかかりました。

事務局も申請書を提出する時点ではわからないところが多く、展開が始まってから申請内容に足りないところを幾つも感じる状態でした。そのため、地元協力者会議は予定よりも数県を増やし、それに伴い訪問校も増やしました。活動普及のためにそうしましたが、その部分は全て予算外になったので、限界は感じました。また、地元への訪問も2ヶ月ごとに回る予定をたてていましたが、それでは間に合わない事が判明し、連日訪問する中では人手不足もありました。学校訪問などで運営スタッフが予想以上に必要となりました。4人を担当者としましたが、それ以上に増やせず、マンパワー不足が目標達成に大きな敗因の一つになりました。

一年間で広め種を蒔いた状態だと感じています。今年申請をしなかったのは、種を蒔いた状態をさらに深く浸透させ、熟成させる年にしようとしたからです。

「文化ボランティア」という概念は想像以上に受け入れられるものであると感じました。ただ、イメージしにくい点、自分がどう動けばいいのかが分かりにくい点が普及の妨げになっていると思います。おそらく、「文化ボランティア」の活動は自然と地域に存在することが本来の姿なのでしょう。地域での展開をどう組み立てるか、そのためのキーマンをどう育てるかが大事だと、活動を通して痛感しました。

にしすがも創造舎

■ **主な活動フィールド** : **アートと地域の人々を結ぶ多様な事業**
■ **所在地** : **東京都豊島区**

団体紹介

廃校校舎を転用し文化芸術創造の拠点として2004年10月にオープンしました。地域再生計画で認定を受け、豊島区と文化創造支援事業実施協定を結ぶ「アートネットワーク・ジャパン」と「芸術家と子どもたち」の二つのNPOが共同で管理運営をおこなっています。

稽古場施設を中心に、より開かれた形をめざしてアートと地域を結ぶ多様なアートプログラムを展開しています。「創造・発信・交流の拠点」として、子どもも大人も地域住民もアーティストも自由に集えるアートセンター+チルドレン・ミュージアムをめざしています。

趣旨・目的

豊島区の基本政策である、文化によるまちづくりの一環として、文化を担う人材(文化ボランティア)の育成と、継続的な活動をサポートする核としてのボランティア・コーディネーターの育成を目指します。地域再生計画

で認定を受けた廃校活用施設「にしすがも創造舎」を拠点とするNPOと協働で実施します。また、将来に向け文化ボランティアのネットワークの基礎作りをします。

概要

(1) 読み聞かせ実践講座

- ①講座名 読み聞かせボランティア養成講座「心に響くドラマリーディング」
- ②概要 プロの演出家、俳優から「聞き手に届く」読み聞かせを基本から学び、豊島区内で文化ボランティアとして活躍できる人材を育成しました。
運営:にしすがも創造舎(豊島区、特定非営利活動法人アートネットワーク・ジャパン)
- ③講師 倉迫康史(演出家)、三村聡(俳優) ほか
- ④受講者 15名(応募者33名/定員:15名)
- ⑤参加費 1,000円
- ⑥内容 会場:にしすがも創造舎

回	開催日時	実施内容	参加者数
1	6月5日(火) 13:30~16:30	ドラマリーディングとは~声によるコミュニケーション ・ドラマリーディングの解説 ・コミュニケーションの重要性 ・楽しく声を出すには	15
2	6月12日(火) 13:30~16:30	絵本を読む ・絵本の特徴 ・大人数に読む場合(紙芝居パターン) ・少人数に読む場合(一緒に読むパターン)	15
3	6月19日(火) 13:30~16:30	小説を読む ・小説の特徴 ・題材をどう選ぶか ・手紙、エッセイなどを読むときとの違い	14
4	6月26日(火) 13:30~16:30	発表会の作り方 ・具体的な題材選び ・読み聞かせにおける様々な演出 ・発表会をプランニングするには「上池袋ことぶきの家」職員からアドバイスと質疑応答	14
5	7月3日(火) 13:30~16:30	発表会の準備 「特養老人ホームアトリエ村」職員からアドバイスと質疑応答	15
6	7月10日(火) 13:30~16:30	発表会の準備 豊島区立図書館職員からアドバイスと質疑応答	14
7	7月17日(火) 13:30~16:30	成果発表会	15
8	7月24日(火) 13:30~16:30	講評と交流会 今後の活動について ・読み聞かせ講座卒業生(ドラマリーディングの会)からの活動紹介 ・懇談会形式で今後の活動についての話し合い	14
	計		116

概要(続き)

(2) 読み聞かせ成果発表会

- ①事業名 読み聞かせフェスティバル～心に響くドラマリーディング～
 ②概要 豊島区内で活動する読み聞かせ団体や、以前に開催した読み聞かせ講座の卒業生等がリーディング公演を行い、多くの区民に読み聞かせの魅力を紹介するとともに、読み聞かせ団体や朗読団体相互の交流を図りました。
 運営:にしすがも創造舎(豊島区、特定非営利活動法人アートネットワーク・ジャパン)
 ③内容 豊島区内で活動する読み聞かせ団体や、以前に開催した読み聞かせ講座の卒業生等が16名で8演目を発表、終演後にポストーク、及び読み聞かせ団体や朗読団体との交流会を開催しました。
 ④参加者 公演:115名 交流会:77名

(3) フロントスタッフ育成講座

- ①講座名 劇場スタッフ体験講座～アートセンターへようこそ～
 ②概要 座学から俳優体験、稽古場見学等を通じて、演劇公演等のフロントスタッフに必要な知識や技術を習得しました。講座の最後には、演劇公演にフロントスタッフとして参加して、基礎から本番までを体験しました。
 運営:にしすがも創造舎(豊島区、特定非営利活動法人アートネットワーク・ジャパン)
 ③講師 衛紀生(可児市文化創造センター館長)、星乃もと子(シアターマネージメントプラン代表)、下総源太郎(俳優)
 ④受講者 11名
 ⑤参加費 1,000円
 ⑥内容 会場:にしすがも創造舎

回	開催日時	実施内容	参加者数
1	8月5日(日) 13:30～17:00	レクチャー ・劇場ボランティアの役割と意義、実例 ・劇場フロントスタッフとは	8
2	8月6日(月) 13:30～17:00	俳優体験ワークショップ ・家でも出来る俳優のストレッチ ・質問～俳優の仕事について ・少人数に読む場合(一緒に読むパターン) ・戯曲を読んでみる	8
3	8月19日(日) 13:30～17:00	けいこ場見学@体育館 ・舞台「お～い幾太郎!」通し稽古見学 ・トーク「市民とプロによる舞台製作」	8
4	8月23日(木) 13:30～17:00	劇場フロントスタッフ実践講座 ・チケットもぎり、遅れ客対応などを実践 ・実践に向けて質問や打ち合わせ等	10
	計		34
	8月25日(土)～ 9月1日(土) 期間中2回以上	劇場フロントスタッフの実践編 ・演劇公演「オズの魔法使い(にしすがもアート夏まつり)」のフロントスタッフとして参加	

概要(続き2)

(4)子どもと向き合う大人のためのワークショップ

- ①講座名 現場で学ぶワークショップのすすめかた
- ②概要 プロの芸術家による子どもワークショップの現場に立会い、事前打合せから現場サポート、後片付けまで実際にワークショップの運営に係わり、ファシリテーター(支援する人、良さを引き出す人)の役割を体験することにより、ワークショップのすすめかたを学びました。
運営:にしすがも創造舎(豊島区、特定非営利活動法人芸術家と子どもたち)
- ③講師 KOSUGE1-16(現代美術ユニット)、漆崇博(NPO法人S-AIR)
- ④受講者 12名
- ⑤内容 小学生のためのワークショップ「みんなで巨大紙ずもう大会をひらこう！」にスタッフとして参加してワークショップ運営に係る体験をする。最終日はにしすがも創造舎にて開催される「どんどこ！巨大紙相撲にしすがも場所」の現場にも参加・体験をしました。
会場:にしすがも創造舎

回	開催日時	実施内容	参加者数
1	10月20日(土) 13:00~15:00	オリエンテーション ・子どもが参加するワークショップの事例紹介 ・「みんなで巨大紙ずもう大会をひらこう！」概要説明、企画、役割分担	7
2	10月27日(土)	※第2~5回は12:00~17:30	5
3	11月3日(土)	「みんなで巨大紙ずもう大会をひらこう！」運営 ・準備 ・子どものサポート ・ワークショップ運営	7
4	11月17日(土)	・ふりかえりミーティング	5
5	11月24日(土)	「どんどこ！巨大紙相撲にしすがも場所」をモデルとして運営を想定 ・準備 ・ものづくり(試作)	7
6	12月1日(土) 10:00~17:00	「みんなで巨大紙ずもう大会をひらこう！千秋楽」にむけて 会場準備、事前準備、直前ミーティング	7
7	12月2日(日) 10:00~17:00	「みんなで巨大紙ずもう大会をひらこう！千秋楽」 「どんどこ！巨大紙相撲にしすがも場所」へスタッフとして参加 会場準備、子どものサポート、イベント運営、ふりかえりミーティング	7
	計		45

概要(続き3)

(5) 豊かな子どもの育ちを考えるための研修会

- ①講座名 体験して考える子どものためのワークショップづくり
- ②概要 子どもを対象としたワークショップの場を想定し、アーティストによる実践形式の研修を行い、子どもが潜在的に持っている創造力、コミュニケーション力を伸ばし、子どもを学びあい、遊びあうことのできるワークショップ作りを考えていきました。
運営:にしすがも創造舎(豊島区、特定非営利活動法人芸術家と子どもたち)
- ③講師 遠藤幹子(建築家)、KOSUGE1-16(現代美術ユニット)、松井雄一郎(グラフィックデザイナー)、北島尚志(表現活動クリエイター)、岩井成昭(美術家)
- ④受講者 延112名(応募者:延165名/定員100名<各回20名>)
- ⑤内容 会場:にしすがも創造舎

回	開催日時	実施内容	参加者数
1	1月23日(水) 18:30~21:00	『子どものための遊び場・学び場づくり』 ・基礎編「公園を作ろう」～ダンボール, 針金, 粘土等で公園の模型作成 ・実践編「部屋を改造しよう」～テーマを決めて改造 ・講師の地域活動を発表	17
2	1月25日(金) 18:30~21:00	『身の回りから新しい遊び場をつくる』 ・講座のテーマ、「スポ研」の説明～スポーツをつくるスポーツ、新しい遊び、スポーツを考えること ・「スリッパの脱ぎ方がキレイになるゲーム」を考えよう ・「もちつもたれつ」が成立する仕掛けづくり ・質疑応答	18
3	1月30日(水) 18:30~21:00	『「なにかが起ころう！」を伝えるデザイン』 ・アイスブレイク&エクササイズ(数人グループに分かれて) ・伝えるためのジェスチャーゲーム～1つのストーリーをジェスチャーで表現 ・おもしろさを伝えるワンシーン～ジェスチャーゲームのストーリーをワンシーンで表現、意見交換 ・チラシ作成～今日の講座で一番楽しかったことを言葉を入れないチラシで表現 ・まとめ～作成者側ではなくチラシを見た子どもの視点	20
4	2月6日(水) 18:30~21:00	『関わりの中で自分を表現するコミュニケーション』 ・アイスブレイク&エクササイズ ・言外コミュニケーション(少人数)～信頼関係・相手を見る ・言外コミュニケーション(キーワードを使って体で物語をつくる)～自分を表現する、自分の居場所 ・複数の人の話を聞く(子どもとのコミュニケーションを想定して)～話し手に不快感を与えない対応	20
5	2月8日(金) 13:30~16:30	『記録に残せるもの残せないもの』 ・衣装ワークショップ(「記録をとる」ことをワークショップにとりいれる)～参加者が古着を交換してポラロイド撮影～古着のアピールを録画～撮影のフレーミングを決める	16
	計		91

結果・成果

(1) 読み聞かせボランティアの育成

豊島区では、平成17年度より、文化庁の「文化創造のまちづくり事業」の委託を受け、様々な文化の担い手育成事業を展開してきましたが、その中で、読み聞かせ実践講座の受講生が平成18年度より区内の児童・高齢者施設、図書館等で読み聞かせボランティアとして

活動し始めています。今般の事業では、かかる活動をさらに推進するとともに、「読み聞かせ」初心者と、既活動者、また受け入れ側である区内施設の職員等との情報交換・交流を図り、以下の効果及び成果を得ました。

読み聞かせボランティア養成講座「心に響くドラマリーディング」において、読み聞かせ講座卒業生からの活動紹介及び、受け入れ側である区立施設の職員からのアドバイスと質疑応答を行い、講座終了後の継続活動についての情報提供・交流を行いました。当講座の受講生は、講座終了後にスキルアップのため学習グループ（4期生の会）を発足するとともに、区内各施設において読み聞かせボランティアとして活動しています。

読み聞かせフェスティバルにおいて、公演後に読み聞かせ・朗読グループ相互の交流会を実施しました。会場において、“読み聞かせネットワーク”構築のための具体案を提示し、①活動団体相互と受け入れ側との交流会の実施②読み聞かせ活動の情報を発信③「にしすがも創造舎」を文化ボランティアの拠点として「読み聞かせボランティアコーナー」を設置しました。

講座応募者数	33名
受講者数	15名
修了後の活動者数	10名
定期的・継続的な活動施設	4施設

交流会参加者数	77名	
内訳	これまでの講座修了生	39名
	読み聞かせ・朗読関係団体	23名(11団体)
	そのほか	15名

(2) フロントスタッフの育成

「劇場スタッフ体験講座」において、チケットのもぎり等実践の学習から、俳優体験、舞台の通し稽古の見学さらには演劇公演「オズの魔法使い(にしすがもアート夏まつり)」にスタッフとして参加し、受講生からは講座で学んだことを実践することが出来たと好評を得ました。また、本事業の実施場所である「にしすがも創造舎」は、豊島区の廃校施設を利用した文化芸術発信の拠点であり、かかる施設を豊島区と協働して運営しているNPO法人(アートネットワーク・ジャパン)から、今後の舞台芸術等の活動情報を講座受講者に提供し、芸術祭や舞台等に個人でスタッフとして参加する機会と場を設けています。

応募者数及び参加者数	11名
修了後の活動者数	3名

(3) 子ども・親子向けワークショップ

「現場で学ぶワークショップのすすめかた」、「体験して考える子どものためのワークショップづくり」では、さまざまなアーティストが講師として参加し、受講者がワークショップづくりに参加して、アーティストとともにワークショップを考えていくという新しい試みでした。

参加者の主体性が求められる講座でしたが、各参加者の中に参加する動機と成果があり、講師も1つの結論に限定せず、参加者の体感したことを尊重するカリキュラムでした。

子どもを対象としたワークショップでは子どもを支えると同時に、参加している大人がワークショップを楽しむ事が肝要であるという基本を、参加者が共通して学んだことは、大きな成果です。

「現場で学ぶ」参加者数	12名	
「体験して考える」参加者数	43名	
受講後の活かし方	現在の仕事(子ども関係)	10%
	地域活動・市民活動	26%
	そのほか	10%
	今は特にない(無回答)	54%

問題点

文化ボランティアの育成についての様々な事業を展開しましたが、本事業の参加者が、今後、継続的に活動できるような機会と場がまだ少ないという現状があります。

情報収集の機会と場を試みましたが、文化ボランティアの発展のためにも、さらに活用しやすくなるよう工夫していくことが必要です。

ボランティア・コーディネーターの育成は難しく、自主グループは立ち上がりましたが、活動のコーディネート機能を持つにはいたりませんでした。

子ども向けワークショップについては、とくに豊島区民参加率が低いという結果となりました。

課題

劇場でのボランティア活動では、にしすがも創造舎にとどまらず、区内の劇場と連携をとり、ボランティア受け入れを推進していく必要があります。まずは、平成19年度にオープンした豊島区舞台芸術交流センターともタイアップしていく予定です。受け入れには劇場側として、コーディネート等の課題がありますが、これをクリアすれば、活動の場が確保できます。

読み聞かせボランティア(現リーディングボランティア)の交流会や、HPでの情報発信、文化ボランティアコーナー設置をしましたが、今後は、ボランティア自身と工夫し、運営していくべきだと考えています。時間はかかりますが、そうすることで、主体者にとって有効な環境整備ができると思います。

ボランティアの自主的、主体的な活動を尊重するため、区としてのボランティアの登録制はとらない方向ですすめています。コーディネーターも自主的な活動の中で、またボランティアネットワークの中で、育っていくよう支援していきたいと思います。そのためには、ボランティアの主体性を尊重した細やかな相談機能を果たしていきながら、ニーズに応じた講座開催等を検討する必要があります。 「にしすがも創造舎」が文化ボランティア育成の発信拠点となり、本事業の成果が地域に還元され、地域と密着した事業展開としてボランティア育成を図っていきたくて考えています。

本事業は文化ボランティアのきっかけづくりとして効果はありますが、継続的な活動には参加者の自主性が不可欠です。今般実施した「読み聞かせフェスティバル」や交流会についても、将来的にはボランティアが主体となって運営する等、受動的ではなく主導的な活動により文化ボランティアのネットワークが構築されるよう支援していくことが課題となります。

さらに活動の場を広げたり、豊島区の文化ボランティア活動を発展させるためには、区とNPOとボランティアが協働し、互いの持ち味を活かしていくべきと考えます。そのためには、互いが信頼し尊重できる関係作りのため、「にしすがも創造舎」を拠点とした連携・交流をしていくことが重要だと考えます。



リーディングフェスティバル

特定非営利活動法人 子ども劇場東京都協議会

■ **主な活動フィールド** : 地域における子どもの文化活動
■ **所在地** : 東京都新宿区

団体紹介

子ども劇場をはじめとする、地域で子どもの文化芸術活動を行っている団体を支援することを目的に、2003年2月にNPO法人として発足しました。

主な活動内容は(1)文化団体との交流 (2)地域リーダー養成 (3)あそび表現活動研究 (4)鑑賞活動推進 (5)子ども文化地域コーディネーター養成 (6)地域で子どもの文化活動を行っている団体への情報提供・交換などです。

「子どもの文化権を保障するために、芸術文化活動やあそび文化活動を総合的に地域に創り出すことを

通して、子どもの生活圏で地域文化のネットワークを広げていきましょう」を共通の基本方針として、活動を展開してきました。

発足当初から、子どもたちの文化芸術活動を企画・推進・援助することの出来る「子ども文化地域コーディネーター」の存在の必要性を提唱しつづけています。

子どもの文化権を保障するには、子ども劇場の中だけでなく、町会やPTA、他の文化団体など、地域で共に子どものことを考えている人々と共同して文化活動を創り、そのことをあらためて検証し、発展と充実を目指しています。

趣旨・目的

学校・家庭・地域において文化芸術活動(表現活動・あそび体験活動・鑑賞活動)の機会の充実・活性化を図る時不可欠である「子ども文化地域コーディネーター」を、子どもたちの生活圏に見合うように養成する

ため、それぞれの地域のニーズに合った講座を開催することを目的とします。また、子どもの文化芸術に関する情報を収集・発信するためのITネットワークを構築し、コミュニケーションの充実を図ります。

概要

<活動1>子ども文化地域コーディネーター養成講座を実施

地域で子どもの文化芸術活動に関心のある人を対象に、それぞれの地域のニーズに合った内容の講座を、開催地域の子ども劇場などと相談しながら3回連続講座として開催。それぞれ30人を定員に都内10ヶ所で開催し、300名のコーディネーター養成を行いました。

講座概要 第1回「子どもの状況と子どもの文化権」
第2回「子ども文化地域コーディネーター概論」
第3回「子ども文化地域コーディネーターの実際」

<活動2>子ども文化の情報ネットワークの構築

子ども文化地域コーディネーターのための情報ネットワークの構築(Web上での情報入力・閲覧、メーリングリストによる情報発信)を進めていきました。



結果・成果

開催地の相互交流を持ちながら企画を推進していったため、遠隔地の講師の招聘も実現し、地域の特徴に即した質の高さをもつ講座を開催することができました。各地域で子どもの文化芸術活動に関心のある人をはじめ、PTA役員・自治体職員・議員など、幅広い層の参加となり、参加者は都内10ヶ所で延べ709名と、多くのコーディネーターを養成することができました。コーディネーターとして動き出した人は約350名程ですが、「子どもにとって文化活動は大切であること」や、「地域の文化力が子どもの育ちを保障すること」を認識できる人が広がったと、開催地域の子ども劇場からの感想の中にあり、それが一番の成果でした。

また、講座開催にあたってリーフレットを4,000部作成し、講座参加者や開催地域の子ども劇場を中心とした子どもの文化芸術活動を行っている団体に配布しました。それにより、文化ボランティアである「子ども文化地域コーディネーター」という概念とその必要性を発信できました。

“「子ども・文化・地域」をキーワードにして活動する人にとって役に立つ情報を”と、子どもと文化の情報ネットワークをWebサイトで2008年2月1日よりスタートさせることができました。現在、約5,000件のアクセスがあります。



問題点

3回連続講座に継続して参加し、次の活動へと繋がられる人ばかりではありませんでした。地域の開催主体となる集団が、地域の実情をきちんと把握し、目的・参加対象・開催時間などの設定を明確に仕切れない問題点が明らかになりました。

また、「単年度ではなく継続して開催しなければ、優れたコーディネーターは養成しきれないこと」、「子どもたちの生活圏に複数のコーディネーターが存在するためには、参加者を更に広げる必要があること」が明らかになりました。

課題

活動にあたり以下の課題点が浮かび上がりました。

- ・子どもの生活圏に複数のコーディネーターが存在できるために、開催地域を広げ、より多くの参加者を広げていくこと。
- ・各地域での継続した講座開催ができるよう、地域の開催主体となる人たちの研鑽を含め、各地域が自力で実行委員会を構成し、開催できることをめざすこと。
- ・講座内容の企画段階から専門家との連携を深め、より充実した講座内容にすること。
- ・講座全体を通して、子ども文化地域コーディネーターの概念整理を深め、より実践的な役割を明確にしていくこと
- ・情報ネットワークを広げ、活用できるものにしていくこと。

地域でボランティアをする人の年齢や社会的条件に偏りがあり、子育て世代の参加が難しいのが現状です。ボランティアが育ちつづける地域にしていくための具体的な手立てや工夫が必要と感じました。

子どもの生活圏でのボランティアを広げるためには、自治体単位の情報センターやコーディネーターが必要です。そのためには、無償ボランティアだけでなく、より専門的な文化ボランティアとして有償の専門職員を位置づけることが理想で、そのためにも、公的な資金援助も必要ではないかと思えます。

■ ■ ■

特定非営利活動法人 トリトン・アーツ・ネットワーク

■ ■ ■

■ 主な活動フィールド : クラシック音楽の普及活動
■ 所在地 : 東京都中央区

団体紹介

クラシック音楽活動を通じて地域社会に貢献する特定非営利活動法人です。

東京都中央区晴海・トリトンスクエア内第一生命ホールを拠点とし、ホールでの芸術活動と周辺地域へ音楽を届けるコミュニティ活動を行っています。



趣旨・目的

小学校や病院、ケアホームへ音楽を届けるアウトリーチ活動をコーディネートする人材を育成し、その活動を全国的に広めることを目的としています。



概要

現在、「アウトリーチ」分野の現場で活躍している方々を講師として招き、理論から実際の現場で行われている活動を学ぶことを目的として『アウトリーチコーディネーター育成研修会』を下記のスケジュールで実施しました。

第一回 2007年9月22日(土) 14:00~16:00

「アウトリーチは魔法の水? ~ある地域で続く訪問プログラムの実際~」

講師: 榎本広樹(魚沼市小出郷文化会館)

ねらい: 国内で10年前より「アウトリーチ」活動を実施している新潟県魚沼市小出郷文化会館職員である榎本氏より、音楽アウトリーチの意義と手法、問題点、今後の課題について学び、「アウトリーチ」全体について理解

第二回 2007年10月14日(日) 14:00~16:00

「アウトリーチプログラムの作り方」

講師: 田村緑(ピアニスト)

ねらい: 演奏家側から見た「アウトリーチ」を学ぶことによって、演奏家が何を思い何を届けようとしているかを感じ取る力を身につける。

第三回 2007年12月8日(土) 14:00~16:00

「演劇ワークショップの現場」

講師: 川島英樹(世田谷パブリックシアター)

ねらい: 第一回、二回を通して音楽によるアウトリーチについて理解を深めたが、更に多角的に芸術を捉えるために、他ジャンル(今回は演劇)の現場を知り、音楽に取り入れられる要素があるか検討する。

第四回 2008年1月12日(土) 13:00~15:00

「地域・学校・NPOの連携をよりよいものとするためのポイント」

講師: 藤川大祐(千葉大学准教授)

ねらい: 地域住民、学校、NPOがそれぞれの立場を活かして連携を組み活動している事例を学び、今後、発展的・先駆的な活動に取り組む力を身につける。

結果・成果

研修会受講者数

第一回 28人 第二回 23名 第三回 17名
第四回 22名

当事業により養成されたコーディネーター数 8名

コーディネーターの活躍の場

- ・自ら住む500世帯マンションの中でキッズクラブ役員と協同で弦楽四重奏のアウトリーチを実施(東京都江東区)
- ・在住地域で第二回目講師のピアニスト田村緑によるコミュニティコンサートを実施。(神奈川県川崎市)
- ・他音楽祭ボランティアスタッフとしてアウトリーチを企画。(大分県)
- ・自らが演奏家として未就学児対象にアウトリーチを実施。(全国)



問題点

今回は座学を年間4回数ヶ月期間を空け、様々な話が聞けるよう講師も毎回変え実施しましたが、この方法ではコーディネーターとして必要な知識の土台作りのみで終わり、実際に実施に至るまでの知識を得るには実

地研修が必要不可欠であることが分かりました。また個人でコーディネーターとして活躍するには2, 3年の実績を積む必要があります。

課題

今後は、座学から実地研修につながるように、座学は一人の講師による集中型(2ヶ月間で6回程度)で行い、実地研修は一人が一つのアウトリーチを受け持つ形で検討しています。また、文化ボランティア本人になるべく金銭的負担のかからないよう、実地研修に係る交通費や通信費などを確保できる資金繰りを模索します。

アウトリーチの実施には、演奏家の謝礼やピアノの調律費、楽器運搬費など必ず費用がかかります。受け入れ先が費用負担をする場合もありますが、アウトリーチコーディネーターは資金の調達をすることが一番の仕事であるともいえます。当事業では実地研修を行ったとしても資金調達の練習はできないため、

コーディネーターが別の地域へノウハウを持ち帰り実施しようと試みる際に資金調達面で躓く可能性があります。その解決方法を文化ボランティアと一緒に模索していく必要があります。また、ただ音楽を身近に聴かせるだけでない“意味のある”アウトリーチは、演奏者に因るところが大きいです。どのような演奏者に頼むのか、どのようなアウトリーチを目指すべきか、アウトリーチコーディネーターは多くの事例を知る必要があります。トリトン・アーツ・ネットワークは今後、それぞれに活動しているコーディネーターによる事例発表会や勉強会を開いたり、コーディネーター同士の連絡網を強めるためのバックアップをしていくことが課題です。

特定非営利活動法人 歌い人

- 主な活動フィールド : 音楽を媒体にしたコミュニティーの形成や活気ある町づくりに寄与する活動を提案するとともに、音楽家の地位向上と裾野拡大を目指し活動
- 所在地 : 神奈川県横浜市

団体紹介

当法人では、音楽という身近であり且つ有効なコミュニケーションツールを用いて、さまざまな世代の地域住民に対し、音楽を架け橋に人々を繋げる事業として、主に以下のような事業に取り組んでいます。

- 1 **音楽全般に関わる調査・研究事業**
アマチュア音楽家に対するアンケート調査、生涯学習施設での音楽講座の事態調査等
- 2 **音楽イベントの企画運営事業**
ストリートミュージシャンによる野外音楽イベント、ゴスペル市民サークルによる合同コンサート等
- 3 **音楽ボランティアの派遣事業**
市民講座への講師派遣、福祉施設への演奏家の派遣等



募集チラシ

趣旨・目的

音楽分野において、優れた能力や豊富な知識・経験をもつ人々に、文化ボランティア活動の普及・啓発及び

継続的な活動の場を提供し、文化芸術の継承と発展に貢献できる環境の整備を図ることが目的です。

概要

本事業では、年齢・実績問わず、ボランティア活動への意欲・興味がある音楽家で、これまでにボランティアの活動や指導の経験がない方、またはその初心者を対象に、文化ボランティア活動(音楽分野での指導)への参加を啓発するための講習を実施しました。

講習に参加するにあたり、参加希望者は、プロの音楽家の皆さんのご協力の下、事前に実技等の審査を受け、その後、ボランティアの概念及びボランティア指導者としての心得や知識などを本講習にて体系的に学びました。

講習の全課程を修了した方全員に修了書を、また当法人の活動に賛同し、積極的に文化ボランティアに参加したいと考える方には、当法人より認定証を発行し、講習終了後希望者の方には、実際の市民講座にアシスタントとして参加していただき、音楽活動に関心の高い市民の方との交流も実現しました。

実施回数／年2回

第一回／9月30日、10月6日、7日、8日、12日(横浜ワールドポーターズ会議室他)

第二回／12月7日、8日、15日、16日、23日(労働プラザ他)

一日目 テーマ「ボランティアの基本精神」

ボランティアの概念から活動における意義を理解し、ボランティア活動への更なる意欲を啓発。

二日目 テーマ「生涯学習の原理」

生涯学習の原理を学び、学習ボランティアそのものが自身の生涯学習であることを踏まえ、学習者としての立場で、生涯学習についての理解を深める。

三日目 テーマ「生涯学習の方法と学習プログラム」

生涯学習にはどのような方法があるのか、援助する側には何ができるのかを学ぶ。

四日目 テーマ「各成長期における特徴と指導の留意点」

様々な学習者に対して適切な援助が行えるよう、少年期から高齢期までの各発達期においての特徴を理解する。

五日目 実習「学習プログラムの立案と発表」

これまでの講習を踏まえ、講座を運営する場合を想定して、各自で学習プログラムを立案し、他の参加者の前で発表。具体的な活動のイメージを描く。

結果・成果

音楽という身近な文化活動を通じて、“個性を活かした自分らしいボランティア活動”が可能であることを多くの方に知ってもらうことができたと感じています。

具体的には、100件近くの間合せや相談があり、内70名が実技審査に応募し、その内の合格者58名が講習に参加しました。ほぼ全員が全課程を修了し、8名の方が当法人に入会、音楽指導ボランティアとして当法人にて認定しました。すべての参加者がすぐに活動を希望するばかりではなく、今後のボランティア活動の一助になればという思いで参加されていたため、実際入会に至る方は少なかったものの、ほとんどの方が最終日まで参加していただけたことは、価値ある講習が実施できたものと自負しています。

年齢にとらわれることなく、経験者にとっては“新たなボランティア活動”となり、未経験者にとっては“新たな文化活動”に参加するきっかけが作れ、講習参加者からも、「本講習に参加できたことを大変幸運に思います」「深い内容を分かりやすくまとめていただいたテキストは、これからも大事に読み返し使わせていただきます」「今回の講習を受けなかったらわからないことばかり。私にとっての学習になりました」などのご感想をいただきました。今後、多くの市民が文化活動を通じて、積極的に地域活動に参加し、またそこで新たなコミュニティの形成に寄与することが期待されます。

問題点

本事業を多くの方に知ってもらうため広報活動を行わなければなりません、現在のところインターネットでの告知と県内文化施設などでのチラシの設置しか有効な手段がありませんでした。県内文化施設などへの周知も十分に図れていないことから、チラシ設置を断られるケースも少なくありません。

比較的広範囲で活動する場合、NPO法人単独での働き掛けには限界があり、市民と行政の間に、我々のような民間団体が入る余地がなかなか見つけられない状況です。

このような状況は、今後もっと円滑な情報交換や、行政から各地域への周知などを積極的に行ってもらえないと改善されないものと感じています。文化ボランティアへの参加を希望する方、生涯学習として文化芸術活動に取り組みたい市民、この両者が直接的につながる場である地区センター等の文化施設に積極的に働きかけ、当法人のような専門性の高い民間団体と行政が連携し、市民の積極的な文化活動並びにボランティア活動を支援していく必要があると考えます。

課題

採択時もしくは採択前に、もっと密に関係機関へ本事業の周知を図り、また行政の協力の下、ボランティア参加希望者達の受け入れ先にあたる施設や関係各機関との連携を図れば、より具体的な活動の場を獲得することができたのではと考えます。

個人性の原理に基づいた学習活動およびボランティア活動であっても、実際は個人で活動するには困難も多く、当法人などの民間団体が市民の身近な相談窓口となり支援していく必要があると感じています。そのためには各関連機関に我々のような専門性の高い民間団体の存在を知っていただき、積極的に活用してもらえるよう、働きかけてまいりたいと考えています。

福祉や環境問題などに関わるボランティア活動に比べ、文化・芸術に関わるボランティア活動は、十分な理解がなされておらず、「文化ボランティア」という単語も市民にとってはまだまだ親しみのない言葉であると感じます。

まずは、文化ボランティアという活動の意味や意義を、広く市民の皆さんに理解していただき、もっと身近に感じていただけるよう、音楽イベントでのスタッフなど気軽に参加できるボランティアの機会を増やしていくと共に、文化・芸術に興味のある方を対象にしたボランティアセミナーなどを各地域で開催していきたいと考えています。



講習風景

特定非営利活動法人 横浜シティアートプロモーション

- 主な活動フィールド : 現代アート、
クリエイティブシティ
- 所在地 : 神奈川県横浜市

団体紹介

2001年および2005年に開催された「横浜トリエンナーレ」を通じて横浜に育まれた現代アートに対する深い理解と共に、近代以降、横浜の先人たちが担ってきた文化芸術の先駆的役割を受け継ぎ、地域に根ざした文化芸術の発掘と育成、文化芸術が秘める多様性を常に同時代の表現として昇華し、それらの成果を国内はもとより国際社会へ向けて発信します。その情報の受発信双方向の交流の拠点として「ZAIM」を位置づけます。

さらに、シティアートおよびアウトリーチという市民が主体となって新たな芸術文化創造する活動の拠点としても「ZAIM」を活用するために、2004年7月からゆるやかなネットワークとして活動してきた「はまことり」や「わくわくアート隊」などの活動を統括して、2006年10月に特定非営利活動法人横浜シティアートプロモーション（YCAP）を設立し、さまざまな講座、ワークショップの開催とWEBでの情報発信をしてきました。

趣旨・目的

横浜市では、2001年より「横浜トリエンナーレ」が開催され、市の施策としても「クリエイティブシティ構想」が進められ、多くのアーティストが活動するようになりました。多くのアートボランティアも参加をしていますが、県外者が多いこともあって、それらが地域の文化活動や過去からの文化資源の活用につながっていないのが現状です。本事業を通じて、地域に根差した「ボランティア・コーディネーター」と「市民リポーター」を養成し、人を通じて地域にノウハウを残していきます。

さらに、「市民協働ネットワーク」と「シティアート・アーカイブ」の構築によって、横浜各地で地域に根差して文化的な活動をしている団体や個人をむすびます。人と情報のネットワークによって、新しいアート活動やアーティストの力を、地域に根差した文化活動が創造力を高め、人材を集めることができるようにし、地域における文化活動を活性化、推進します。

概要

名称: ボランティア・コーディネーター研修・育成事業

内容: ボランティアの力を生かすためのボランティア・コーディネートの重要性を知るための研修、および、展覧会ボランティアのスキルアップ研修

方法: 研修会を3回開催、講師: 川崎あや、杉浦裕樹 ミツ山一志 橋本康二 齋藤里紗 岩崎美冴、
場所: 「ZAIM」

名称: 「市民レポーター」育成事業

内容: 一般の書き手を「市民レポーター」に育成し、「市民レポーター」による取材・執筆・編集活動によってアート・ボランティアの活動を広く紹介する

方法: 研修会を3回開催、講師: 和田昌樹 高橋晃
場所: 「ZAIM」

名称: アートを含む複数ジャンルの「市民協働ネットワーク」構築事業

内容: 横浜のアート(芸術文化)活動に関わる市民協働ネットワークを構築し、さらに、各ジャンルをつなぐ活動を行っている団体・個人間のネットワークをつなげる

方法: 交流会(事例紹介)を2回開催、講師: 高橋晃 和田昌樹 杉浦裕樹 野村義純
場所: 「ZAIM」

アートと市民協働に関わる関係団体の基礎情報を提供する「ヨコハマ・シティアート・インデックス」の編集・発行
場所: 「ZAIM」

名称: 市民参画による「シティアート・アーカイブ」構築およびその運営のための研修会

内容: 市民がアートに直接関わるシティアートの広がり記録・保存・活用する「シティアート・アーカイブ」の構築。その記録・制作をするボランティアの研修会を2回開催 講師: 和田昌樹 杉浦裕樹

場所: 「ZAIM」

結果・成果

本事業を通じて、地域に根差した「ボランティア・コーディネーター」と「市民リポーター」合わせて41名が養成されました。さらに、「市民協働ネットワーク」と「シティアート・アーカイブ」の構築によって、横浜各地で地域に根差して文化的な活動をしている60の団体や個人の所在がわかり、ネットワークの基礎ができました。



さらに、交流会および取材を通じて、そのネットワークが人と人のつながりとして構築され、新たなプロジェクトが生まれました。その成果として、「よこはまアートコミュ」「マザーポート楽校」「横浜シティアートプログラム」という、それぞれ複数の異なる団体が協働して取り組みプロジェクトが生まれ、その活動が継続しています。



問題点

過去2回(2001年・2005年)開催された「横浜トリエンナーレ」に参加したアートボランティアが、本事業を通じて横浜各地での地域に根差して文化的な活動をしている団体や個人とつながり、新たなプロジェクトも生まれましたが、それが、横浜市が推進する「クリエイティブシティ

構想」や「横浜トリエンナーレサポーター支援」とつながってきていません。これまでの活動の継続によって生まれてきたネットワークと新たに横浜で活動をはじめアーティストや初めて参加するボランティアをつなぎにくくなっているのが現状です。

課題

本事業によって生まれた人材とネットワークによって、地域に根差した文化活動に、新しいアートプロジェクトやアーティストをつなぎ、地域における文化活動をさらに活性化することが、これからの我々の課題です。「横浜トリエンナーレ2008」に参加する1,000人を超えると予想されるボランティアのコーディネートを行い、彼らを横浜各地域のアートプロジェクトへ繋ぎ、「ZAIM」をアートボランティアの横浜における活動拠点にしていきたいと思っています。

絶えず参加してくるボランティアの参加意欲を高め、その活動をアートによるまちづくりに繋がられるコーディネーターが、継続的に活動できる基盤をつくる必要があります。そのためには、コーディネーターの仕事とそれに見合うペイを確保することが必要であると感じています。



しが文化芸術体験サポートセンター (財)滋賀県文化振興事業団

- 主な活動フィールド : 学校
(小・中・高校・養護)、地域、文化施設
- 所在地 : 滋賀県大津市

団体紹介

滋賀県では、平成12年より、子どもの美術教育を支援するNPOが中心となり、美術館・博物館・芸術家と学校とを繋ぎ、正規の学習として授業内で実施する、本物に触れる文化芸術体験プログラム＝「連携授業」が実施され、多くの文化ボランティアが活動を支援していました。こうした先駆的な活動を引き継ぎ、さらに文化ホールとの連携へと発展させることを目的に、平成18年7月に、(財)滋賀県文化振興事業団内に「しが文化芸術体験サポートセンター」が開設されました。センターでは、小・中・高校・養護学校・公民館など、多様な学校・地域からの相談・依頼の対応、体験プログラム内容の検討、

講師との調整・派遣など、芸術体験プログラム全般のコーディネートと、子どもたちの体験をサポートする文化ボランティア(6割は大学生)の登録・研修・派遣を主な事業としています。

趣旨・目的

昨年度の本モデル事業によって、文化ボランティア養成研修が充実し、特に学生文化ボランティアに関しては、大学との連携も進み、文化ボランティア登録者130名の内、学生は77名となりました。また、研修の受け入れ先となった県内の文化施設とのネットワークも広がり、当センターが県内の文化施設と学校・地域と文化ボランティアを結ぶ役割を果たしてきました。さらに、県外からの見学もあり、文化ボランティア間の交流も深まりました。

平成19年度においては、このような本物体験プログラムに係る文化施設のネットワーク、学生文化ボランティアの大学連携、近畿府県との文化ボランティアによる連携の広がりを目指すとともに、文化施設と文化ボランティアとが協働し、文化ボランティアが実施可能なプログラムの実践に向けた研修にも取り組みました。



関西文化ボランティア演劇ワークショップ・交流フォーラム

概要

学校・地域等において、子どもたちの文化芸術体験をサポートするため、文化施設・学校現場において、文化ボランティア研修・育成・支援を行いました。

- (1)「滋賀県立陶芸の森～世界にひとつの宝物づくり事業」ワークショップ 5月
学芸員と陶芸家のレクチャーおよび、親子やきもの制作体験のサポートスタッフ体験
 - (2)「文化ボランティア活動へようこそ」(初心者向け入門編) 6月
文化ボランティアの初心者、興味・関心のある方を対象に、講義・事例報告・意見交流会
 - (3)夏の美術館研修「センス オブ ワンダー きっかけは、本物との出会い！」 7月・8月
 - ① 第1日目 MIHO MUSEUM「感じてほしい、観てほしいー学芸員のこだわりプログラム」
 - ② 第2日目 県立陶芸の森「やきものの達人と出会う」
グループ毎に一般参加者の研修サポートおよび研修体験
 - ③ 第3日目 県立近代美術館「美術館 ウラとオモテの“おたから”活用術」
研修会スタッフ体験および、学芸員と教職員の意見交流会に参加
 - (4)「滋賀県立琵琶湖博物館の体験プログラムを学ぶ」 8月
博物館学芸員、施設ボランティアによる体験プログラムの研修とボランティア交流
 - (5)百人車座会議 9月
県知事、教育長を囲み、「文化芸術」を通じた次世代育成のこれからの方向性について意見交流を行うことを目的に開催 運営スタッフ体験と会議に参加
 - (6)キッズプラザ大阪「はじめての美術館」 10月
キッズプラザ大阪の子ども向けイベント(2回シリーズ)にスタッフ参加
第1日目 陶芸家の粘土体験プログラムのサポートスタッフ研修
第2日目 MIHO MUSEUMの体験プログラムのサポートスタッフ研修
 - (7)「びわ湖ホールオペラ公開ゲネプロ鑑賞と施設見学」
びわ湖ホールの施設見学およびオペラ(ゲネプロ)の鑑賞による舞台芸術の研修
 - (8)関西文化ボランティア演劇ワークショップ・交流フォーラム 1月(2日間)
テレビや舞台で活躍中の志賀廣太郎氏を講師に迎え、県内外(兵庫、京都、福井、大阪、三重)の文化ボランティア、文化施設関係者対象の演劇ワークショップ研修
 - (9)京都橘大学陶芸ワークショップ 2月
大学内で初めて実施した文化ボランティア研修。信楽焼の複数の作家を招き、当センターの学生ボランティアが、初心者向けの作品鑑賞および本格的陶芸体験の研修
- (1)～(9)研修 延べ参加者数 201名
- (10)文化施設・アーティストと学校等を結ぶ連携授業の実績
 - 実施学校数:26校 ○実施日数:96日 ○参加児童・生徒数:延べ6,626名
 - 参加ボランティア数:延べ 412名



被災地の子どもたちに
アート体験で励ます活動に参加

結果・成果

設立2年目を迎え、本モデル事業を通じて、県内外の文化施設・大学等との連携に重点を置き、研修・育成の内容充実に向けたことで、登録ボランティア130名の内77名は現役大学生となりました。

当センターの中心的支援活動として、滋賀県内の文化施設・芸術家と文化ボランティアが連携して、小・中・高校・養護学校で実施している「連携授業」では、美術館学芸員による教育プログラム、陶芸家とのやきもの造形体験、茶道家とのおもてなしのお茶会や、音楽家・舞踊家との出会いがありました。

専門家の指導の中、文化ボランティアスタッフは、常に子どもたちの思いに寄り添い、子どもたちのつぶやきに耳を傾けていました。このような体験プログラムの現場では、子どもたちが普段と違う表情や、心を開きかけになるなど、教育的な効果も高く、教師や保護者から感謝の言葉をいただきました。

また、本年度は、滋賀県教育委員会の「滋賀の教師塾」との連携で、教員を目指す大学生の中から63名がセンターに登録し、文化ボランティア登録スタッフと共に連携授業や文化ボランティア研修にも参加し、文化芸術が子どもたちの育ちの中で「どれほど大切なものかを実感することができた。」との感想も届いています。

このように学生文化ボランティアは140名と増え、学生たちの参加の動機としては、「人との出会いやつながりを広げ、子どもと関わっていききたい。」「子どもの芸術体験のサポートをしたい。」というものが多く、また、学生

たちの専門分野は、文学・文化政策・文化財・教育・社会福祉・芸術と様々ですが、「子どもへの文化芸術の支援」という考えが共通した活動の動機になっていると思います。

そして、学校現場など子どもたちの文化芸術支援活動に参加することで、自分の専門性を生かして、新しい体験プログラムや子ども企画の提案を行うなど、積極的な関わりを求めるボランティアが20名程育ってきました。

本年は20代の若い世代を中心に、延べ約600名の文化ボランティアが参加し、その中から、センターの企画・運営や、学校教育現場での体験プログラム内容の検討にまで、責任を持って関わられる人材の姿も見られます。

また、7月に起きた新潟県中越沖地震の際、被災地の子どもたちへのアート体験支援活動にも、まだ余震のある中、登録ボランティアの中から10名が参加しました。受身的関わりから、自主的関わり、責任ある存在へと、人が育ってきている、ということの実感もあり、ボランティアからコーディネーター的役割を担える人材へと10名ほどが育ってきており、今後、センターの企画・運営にも責任を持った立場で関わってもらいたいと思っています。

現場の実践を中心とした研修のあり方、様々な文化施設・大学との連携による研修、県外との情報交流が、文化ボランティア育成において大変効果的であったと思います。



教室で子どもに寄り添うサポートスタッフ

問題点

文化ボランティアの子どもへのサポートも喜ばれており、学校で実施している連携授業の依頼は、年々増加の傾向にあります。同じ日に複数の授業依頼が入ることもあり、そういった場合の受け入れ体制、それぞれに動きの違うボランティアの日程調整やスタッフ確保が困難でした。文化ボランティア活動現場の広がりとともに、それを支える文化施設職員や芸術家達、そして何より、様々な要望に対応するため調整役のできるコーディネーター的人材の不足という大きな問題点があります。また、大学との連携の広がりをテーマに、県内の大学における研修の実施や呼びかけなどに力を入れましたが、文化ボランティアに関心のない大学関係者が意外と多く、具体化までは難しく、キーとなる人との繋がり大切さ、それを生かすコーディネート力の重要性を痛感しています。



連携授業「縄文土器をつくろう」学生スタッフが土器の説明

課題

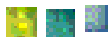
活動場所が特定された施設ボランティアとは違い、当センターの文化ボランティアは学校・文化施設等の現場に直接出向いて子どもたちのサポートを行う活動のため、人数確保・情報の伝達・共有等が重要です。文化施設側のサポートという今までの観点から、経験を積んだ専門性のある文化ボランティアに対して、各文化施設の学芸員と協力して専門的な研修を実施し、プログラム実施の講師として、また主体的にプログラムを主導できる実践者として養成していくことが必要と思います。

また、今年度、文化ボランティアが実際に講師あるいは講師アシスタントを務めた実績もありますが、多くの学生文化ボランティアたちは、大学等で自らが学ぶ分野の知識、経験を深めたり広めたりする目的を持って当センターの活動に参加する者がほとんどです。その目的達成のための研修をはじめとする活動内容の充実、社会人文化ボランティアとの幅広い世代交流を図ることができる体制・仕組みづくりが必要と考えます。

このように、今後の課題としては、文化施設や芸術家と学校や地域とを結び、文化ボランティアを指導・育成

できるコーディネーターの存在が最も重要であり、文化ボランティアの育成と平行して複数のコーディネーターを養成していくことも急務であると考えます。

滋賀県では、過去2年間における経験と実績を生かして、新規の文化芸術体験プログラムの開発や連携授業の対象エリアの拡大をめざすとともに、センターの運営を積極的に支援する(学生)文化ボランティアやコーディネーターの育成機能も充実させるなど、感性豊かな文化の担い手の育成と多様な人々と豊かに関わる力の育成を目指し、平成20年度から「しが次世代文化芸術推進委員会」内に「しが文化芸術学習支援センター」が開設されることとなりました。民を中心に、官と協働する新しいモデルとして、さらなる可能性を探っていきたいと思います。



特定非営利活動法人 大阪アーツアポリア



■ 主な活動フィールド : アートシーン・病院・地域・能楽堂
■ 所在地 : 大阪府大阪市

団体紹介

大阪アーツアポリアは、実験的なアートプロジェクトを企画実施する非営利団体です。「アーティスト及び研究者が自らの意志により現代芸術の活動を深めることが可能な環境づくりを行い、そのことを通じてまちづくりに貢献していく」ことを目的に2002年に設立しました。

コンサート・ワークショップ・展覧会などのアートプロジェクトは、使われなくなった倉庫・大きな病院・路面電車・オフィスビル等を会場とし、大阪を中心とした関西圏在住の20歳代から40歳代の芸術家や研究者・アートマネージャー・ボランティアスタッフらによって運営しています。

趣旨・目的

自由な創造性を持つアートプロジェクトやワークショップを、地域の病院や能楽堂といった、身近であるが、活動制約の多い会場で、アーティストや各専門家、

そして公募で集まった文化ボランティアとの協働事業として実施することを目的としています。

概要

- (1) インターネット上、及び各会場で、ボランティアとボランティアコーディネーターを公募
- (2) ボランティア及びボランティアコーディネーターを対象とした研修を実施
 - 「アーティストによる事前講座—病院と能楽堂での創作活動の前—」
講師: 池田朗子(美術家)、福重明子(美術家)
概要: 今回のプロジェクト、ワークショップの講師となる美術家2名に、それぞれの創作活動の理念と、それをどう病院や能楽堂の創作につなげるのかビジョンを語ってもらい、その後、美術家と交流し、活動の前の信頼関係づくりを行った。
 - 「安全衛生管理講座—病院でのボランティア活動における衛生管理について—」
講師: 藤田朋子(大阪市立大学医学部附属病院感染管理認定看護師)
概要: 病院で活動をするために必要な安全衛生に関する講義と、手洗い実習を行った。
 - 「能楽堂利用講座」
講師: 山本章弘(能楽師)
概要: 能楽堂の成り立ちと、使用にあたっての注意事項を、実際に能楽堂内を見学しながら行った。
- (3) 小児病棟を会場とし、長期入院のこどもを対象にしたアートプロジェクト(実施日数18日間 のべこども参加者数 100名)にボランティアとボランティアコーディネーターを配置
- (4) 能楽堂を会場とし、伝統芸能に触れたことのない小学生を対象としたアートワークショップ(実施日数1日、のべこども参加者数 100名)に、ボランティアとボランティアコーディネーターを配置
- (5) これらの活動を紹介する報告展を小児病棟がある病院と、大阪のオフィス街にあるアートブックショップ併設ギャラリーで実施。また、「アートボランティアをはじめよう」という、無料配布用の手引書を作成

結果・成果

事前研修「アーティストによる事前講座—病院と能楽堂での創作活動の前に—」20名、「安全衛生管理講座—病院でのボランティア活動における衛生管理について—」20名、「能楽堂利用講座」10名ののべ合計50名が参加しました。

会場側からの研修会実施について、「病院ですでに活動しているボランティアスタッフにとっても基本事項を振り返る機会となりました。(病院のボランティアコーディネーター)」、「能楽堂で師弟関係の中で伝えて来た注意事項を、あらためて一般に伝える機会となり、次年度の能楽堂年間行事へのボランティア導入への足がかりとなった(能楽堂スタッフ)」と、ボランティア活動に対する各施設の意識啓発の機会となりました。なお、受講者は全員が病院(平日の昼間/長期)か、能楽堂(夜間/短期)のボランティア活動に実際に参加できたことは、事業目的としていた各自のライフスタイルにあわせて参加しやすかった結果です。



能楽堂の事業においては、「ご家族の方から子供たちが本当に楽しかったと口々に話してくれた様子や、みなで「小鍛冶」の一節「いかにむねちかちよくのつるぎ〜」と声を出しながらきつね(稲荷明神)ごっこをしながら遊んだ様子、ラップとホイルの芯をせがまれ、残りを必死で使って渡すときちゃんと正座して背筋をのばし太鼓をたたく練習をしていた事等、本当に嬉しいお便りを頂きました。(能楽堂・ブログから)」と参加者が事業後も楽しむことが報告されました。

また、病院のプロジェクトにおいてはボランティアスタッフから「子どもたちから学ぶことや、豊かなアイデアに、参加している私の方が勇気をもらえた気がします」「いろんな人に会えて、いろんな人が見に来るんだなあ、それだけで面白い活動なんだな—と思いました」「二日だけでしたが参加できてよかったです」と、ボランティア活動に参加して意義があったとのアンケート記述がありました。

このような成果は、文化ボランティアを活用することで、地域の協働が可能であると考えられ、その事例報告を「日本アートマネジメント学会第9回全国大会・第三分科会は、コミュニティ・地域とパートナーシップ—(2007年11月24日)」において行いました。



問題点

ボランティアインターンの公募者数が3名(うち昨年度ボランティア経験者2名)と、少なく、文化ボランティアコーディネーターを広く育成していく体制になりませんでした。

病院のボランティアコーディネーターの場合は特に、「平日昼間/長期」であるために、興味と能力があり時間つくれる人数が限られたことが原因だと考えられます。

課題

チラシ配布やネット配信だけに頼らずに、病院や能楽堂などの会場で説明会を開いたり、また文化ボランティアではありませんが、すでに各会場で活動されている方にも直接説明し、人のつながりを広く持ってボランティアコーディネーター人材を募れば良かったと思います。

また、今後の課題として、事業実施会場との連携をより深めていきたいです。そのためにNPOからボランティアスタッフをデリバリーする方式ではなく、各会場側に推進団体をつくり、その団体に当団体で蓄積したノウハウを提供していくように方針転換をし、さらに活動を発展させようと考えています。

特定非営利活動法人 あそび環境Museumアタフ・バーバン

■ 主な活動フィールド : あそび・表現活動
■ 所在地 : 東京都武蔵野市
: 兵庫県神戸市
(平成20年6月より東京都武蔵野市のみ)

団体紹介

アタフ・バーバンとは、アラビア語で「とびらよ ひらけ」という意味です。あそび合い、関わり合いの中で、心のとびらを少し開いてみませんか？！という思いで付けました。町を舞台に子どもと大人が忍者のイメージで遊び合ったり、観るだけでなく、思ったことを表現できる参加型のイメージ・表現活動の作品を作り、公演活動を行っています。イメージ・表現活動を高齢者施設などにて行い、学校・児童館・保育園・図書館を含む公的な施設で研修・ワークショップを行います。そのほかに地域の公園を使った表現活動プログラムなど多数の対象別表現活動プログラムを持っています。



表現活動研究集会の全体会
でのワークショップ

趣旨・目的

広く子どもから大人に対して「あそび・表現活動を通じて、共にあそび合い、関わり合う中で、一人一人が自分

らしく表現することを目指し、豊かなあそび環境及び豊かな地域社会をつくりだすことを目的にしています。

概要

(1) 表現活動研修会(プログラム実践を含む)

昨年、表現活動及びプログラムについて学んだ人たちが、今年度は、実際に保育園、児童館に出向き実践を行った。参加者20名が4つのチームをつくり、幼児対象のイメージ・表現あそびを2チーム、小学生対象のチームを2チームつくりました。

4月20日午前 保育園にて実践、検証、4月20日午後 児童館にて実践、検証

4月21日午後 児童館にて実践、検証、

4月22日、5月6日、12月21日、2月3日 研修会

(2) 高齢者対象表現活動プログラムについて学ぶ

この講座は、学ぶだけでなく、実際に高齢者の方のところで高齢者対象表現活動プログラムを実践しているところに立ち会う・参加する・一緒にスタッフとしてやってみることが組み込まれていたため、参加者は講座の前後に実際に体験しました。

講座では、高齢者対象表現活動プログラムとして、新しい視点〈自分らしく・楽しく〉を「元気で、長生き」の高齢者対象プログラムの中に入れていくか学び、そのプログラムを体験し、創りだすところまで行う。そのことが実際高齢者にどのような作用をするのか、どんな効果をもたらすのかを体験しました。実践場所は、ディサービス・グループホーム・老人施設等、高齢者の様々な居場所での実践でした。

・高齢者対象表現プログラム学習講座

6月24日、7月8日、8月11日、9月23日、10月28日に実施

・高齢者対象表現プログラム実践〈いずみこんこんわくわく座〉

6月22日、23日 ディサービス、8月8日 グループホーム

8月9日 ディケア、9月22日 ディサービス

10月1日 グループホーム、10月2日 ディサービス

10月3日 グループホーム、10月29、30日 ディサービス

11月10、11日 地域の高齢者、12月19日 グループホーム

1月28日 地域のボランティアの会



表現活動講座の様子

(3) 表現活動研究集会開催 (9月15, 16, 17日)

全国で活動している子どもから大人・高齢者までの表現活動に携わる人たちの交流と新たな課題に向かうための研究を目的とした全国集会在神戸市で開催した。2泊3日の日程の中で、乳幼児・子ども・青年・高齢者の対象別の4分科会を設定し、全体討議、交流会を行います。「共感から響関へ」のテーマのもと、4分科会での学びと実践を経て、遊び心響き合う関わり「響関者」というキーワードを確認し合いました。表現活動のこれからと、表現活動に携わる大人(文化ボランティア)の新たなつながりを創り出せました。参加者は10歳代(高校生)から、60歳代まで各世代の男女が参加しました。北は青森、南は九州熊本・大分等全国から参加しました。

結果・成果

研修参加以後、参加者が自分たちの地域で、どのように実際に活動を展開できるかを、今年度は重点的に行いました。

子ども対象の表現活動においては、参加者自身の活動現場で活かしていくことのほか、定期的に研修を積み重ねを設定して研鑽を積んでいくことになりました。

また、高齢者対象表現活動プログラムについても、参加者の置かれている活動の現場で新たな試みが行われていきました。

<新たな試み>

介護施設の現場でのアフタフ・バーバン表現活動プログラムを実際に利用者に向けて行います。また、介護スタッフの学びの会が立ち上がりました。(青森・兵庫・東京・島根)

高齢者の家族を含む会にて高齢者対象表現活動プログラムの表現活動を行うという新しい視点の実践が生まれました。(東京)

表現活動研究集会でつくられたネットワークにより活動が結びつき、そこに新たな人が加わるなど、広がっていきました。

問題点

一番の問題点は、今回の研修が一回体験・経験したからそれで全て分かるということではなく、実践の中で起こる様々な問題に対応できる力を養うことを、一人一人が持つためには、継続して行われ検証されることが必要です。そのことをまとめ、また新たな課題として提供し、相互に学びあう場所や機会を作り出さなければ

ならないが、今回その道筋を明確に作り出していくことが叶いませんでした。

そのため継続した活動を設定し、多くの人がアフタフ・バーバンの表現活動を知り、更に深めることができる場を設定することだと考えました。

課題

あらゆる世代に向けての表現活動自体は、時代の課題と常に向き合っています。またそのことに向き合うことで、表現活動(人と関わる中で、自分らしさを発揮する)が実際に力になることを考えるならば、今年度構築された人のネットワークを生かし、様々な場所でこの活動が起きること、継続されることを考えなければなりません。そのための明確な目的と現実的な実施の方策(予算立て、連携、人材育成)をしていくことだと考えています。

【連携のために(今年度計画し次年度活動が始まる)】

東京井の頭公園を拠点にした「東京ネイチャーランド」を他団体の連携とともに立ち上げました。

①月・2～3回公演・ワークショップを行う(定期的)

この活動に、表現活動を学びたい人たちが関われるように、システムを作り、ココでの活動を発信していくことを4月から実施。

【人材育成のために】

①ボランティアスタッフ育成講座の開催

スキルアップを図る講座・表現活動の入門講座を開催
4月より月1回定期的に開催実施決定

②アフタフ・バーバンの表現活動を知ってもらう活動

対象別表現活動実践の記録及び報告・提案を内容とする出版

・高齢者対象表現活動プログラム実践記録集(3月発行)

・全ての世代に問いかける「(仮)響関として～」の出版(20年8月刊行)

②については、全年度から継続して行っており、次年度に引き継いで行われる

文化ボランティアが現実的な力を発揮するためには、一人一人が、より明確な意識と、そのための知識や技術、そして何よりも人と関わることを深く持つことだと考えます。そのこと抜きだと、やってあげるといった関わりから、抜け出すことはできず、共に文化を創りだすことに向かえないのではないのでしょうか。

まずは、文化ボランティアとしての自分は何ぞ、誰に、どのようにして関わりあうことができるかという問いかけをもつことだと思います。そのためには、このことを知り、学び、更に向かえるための場(講座・実践の場)があること、そこで、様々な分野の人との横の関わりも作っていくことで、表現活動に携わる人の輪が広がっていくと思いますので、その計画を立てています。



高齢者対象表現プログラムの実践

団体紹介

岡山県民、芸術・文化団体、市町村、市町村文化協会等を対象に岡山県における芸術・文化関係の団体の相互連携と自主的活動の充実を図り、芸術・文化を普及振興していくため活動を行っています。

主な業務として、各種芸術文化事業の実施、芸術・文化関係の団体との連携およびその育成、小中学校出前講座への講師派遣、芸術・文化施設などの管理運営等行っています。



趣旨・目的

平成22年秋開催の「第25回国民文化祭おかやま2010」においては、多くの文化ボランティアの参加が予想されます。

その活動をより円滑に運ぶため、相応の統率力を身につけた文化ボランティア・コーディネーターを養成していきます。

概要

会場: ピュアリティまきび(会議室)、岡山県天神山文化プラザ(会議室)、桃太郎アリーナ(第19回全国生涯学習フェスティバル生涯学習見本市会場)

対象: 岡山県内各市町村職員、文化団体メンバー、文化施設のボランティア、大学生ボランティアなど、文化ボランティア・コーディネーター及び文化ボランティアに関心のある者

内容: **岡山の文化に関する講義(各90分)**

(社)岡山県文化連盟会長・大原謙一郎氏(岡山県文化連盟と文化ボランティア)

吉備国際大学教授・臼井洋輔氏(岡山文化概論)

岡山県立美術館学芸課長・守安収氏(日本画)

倉敷市立美術館館長・上西節雄氏(陶芸)

(財)大原美術館学芸課長・柳沢秀行氏(近代絵画)

文化ボランティアに関する講演(先進事例発表など)(各90分)

九州国立博物館ボランティア室長・糸井茂氏「文化ボランティアとは」

鳥取県文化振興財団副理事長・柴田英杞氏「文化ボランティアの現状と課題」

国際芸術センター青森学芸員・日沼禎子氏「官と民の協働」

日沼禎子氏と柳沢秀行氏の対談「文化ボランティアとは」(90分)

AMDA代表・菅波茂氏によるボランティア概論(90分)

「AMDAの目指すボランティア精神」

全国生涯学習フェスティバルにおける実践(2日間)

生涯学習見本市における国民文化祭PRブースで実施しました。親子など来場者を対象にした文化体験(バルーンアート、木版画、切り絵)や国民文化祭PRクイズのサポート、国民文化祭PRちらしの配布など、ボランティア体験を通して、どういう指示があればうまく動けるかを考察。同時に、休憩時間などを利用して、来場客として会場内を視察し、ほかのボランティアグループがどう活動しているかもチェックしました。

実践を踏まえての事後研修(180分)

大原美術館学芸課長の柳沢氏を交え、座談会形式で、全国生涯学習フェスティバルで気づいたことを報告し、文化ボランティアとしてどうあるべきかを話し合いました。

結果・成果

6日間で12講義(各90分)、2度の実践体験を実施

参加人数:40名

・日本画・近代絵画・陶芸の専門家による講義を通じて、国民文化祭開催に伴う県外からの来訪者に説明するに足る、岡山県の文化に関する知識を得ました。

・文化ボランティアの先進事例研究、ボランティア概論を通じて、ボランティアの在り方やマネージメントの心構えを学びました。

・座談会形式で事後研修を行うことにより、各市町村の文化行政担当者同士、また、文化行政担当者と文化団体代表者、市民ボランティアグループ中心メンバーなどのコネクションが生まれ、将来に向けての連携・協働のきっかけとなりました。



問題点

文化行事の多い秋の休日に開講したため、各市町村の文化行政担当者や文化団体代表者からの受講申込みが思うように伸びませんでした。

実施期間に対して内容が濃く、受講者に疲れが見受けられましたが、岡山の文化史や文化ボランティアリーダーとしての心構えなど、しっかりと学ぶことができたようです。

普段のボランティア活動の延長という感覚で参加している受講者が何人かおり、ごくまれにはありますが、講座の覇気が下がってしまう場面がありました。

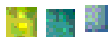


課題

- ・開催を文化行事の少ない時期にする。
- ・開講日数、内容を吟味し、よりコンパクトにすることにより、受講生の集中力を高めて、必要十分な知識・技術を習得させる。
- ・国民文化祭で文化ボランティアコーディネーターとして活躍が期待される、県、各市町村の文化行政担当者、文化協会職員に特化して受講を呼びかける。市民レベルの参加希望者には、事前のレポート提出を促し、講座の趣旨を真に理解しているかを判断する。
- ・当面の目標である「第25回国民文化祭おかやま2010」終了後、文化ボランティア活動をいかに継続し、コーディネーターのネットワークを構築していくか。

文化ボランティア活動に携わる者の意識を高めるため、平成20年9月2、3日に文化ボランティアコーディネーター養成講座を開講します。受講生募集にあたっては以下の点に留意していきたいと思えます。

- ①国民文化祭で文化ボランティア・コーディネーターとして活躍が期待される、県、各市町村の文化行政担当者、文化協会職員に特化して受講を呼びかける。
- ②市民レベルの参加希望者に事前のレポート提出を促し、講座の趣旨をいかに理解しているかを判断する。



特定非営利法人 BEPPU PROJECT



■ 主な活動フィールド : 現代美術・アート・文化
 ■ 所在地 : 大分県別府市

団体紹介

NPO法人 BEPPU PROJECT(ベップ・プロジェクト)は別府市全域を舞台に、現代美術展・パフォーマンス・アート・音楽イベント・トークショー等を企画し開催する組織で、人々に現代芸術を経験する機会、またこれを創造することの出来る環境を提供することにより、現代芸術の振興、芸術活動の促進及び人材の育成を図り、心豊かで活力のある社会作りに寄与することを目的としています。各企画は、別のグループとの連携により展開されます。

私たちBEPPU PROJECTは、自然環境・資源に恵まれたこの美しいレトロなまちと、最先端の考え方や芸術活動が美的に融合し、子供達が夢を持って生き生きと育っていくための環境をつくり、新たな価値を全国に発信しようとする団体です。

趣旨・目的

地域社会の再生が叫ばれる現在、多くのボランティアが参画する文化事業が国内の様々な地域で展開されています。ここ別府市も、2006年11月に「全国アートNPOフォーラムin別府」を開催し、そして市民の意志によって2009年に国際現代芸術フェスティバルの開催実現を目指すNPO法人 BEPPU PROJECTや、文化ボランティアの草分けといえるアルゲリッチ音楽祭事務局など様々な団体が活動しています。

文化・アートが人々に対して、また社会に対してエネルギーを与え、地域に新たな活力をもたらしています。その中でも、アートNPOは豊かな市民社会を創出する役割を担い、社会を変革する潮流において非常に大きな力を発揮できると考えられています。

このような流れの中で、アートによって町やコミュニティ、そして自らの心を再生し、より豊かな地域社会の実現を目指し、全国の様々なボランティアが出会い、交流することを目的として、「アート・フェスティバル・レポート2007」を行いました。

「アート・フェスティバル・レポート2007」では、国内の先駆的な文化団体で特に大型フェスティバルを開催している4団体による、大型文化フェスティバルにおけるボランティアの位置づけや関わり方に対する様々な角度からの考察や報告をシンポジウム形式とパネルディスカッションを行い、また市民と各団体の交流会を開催しました。



概要

<イベントプログラム>

受付開始 12:30～
開会・挨拶 13:00～
各団体によるプレゼンテーション 13:15～14:45
休憩 14:45～15:30
パネルディスカッション 15:30～17:00
休憩 17:00～17:30
交流会 17:30～18:30

日時:2007年11月10日(土) 13:00～17:00

会場:B-Con PLAZA 中会議室

交流会:17:00～(同会場、ワンドリンク付)

入場料:500円

主催:NPO法人 BEPPU PROJECT

共催:大分県民芸術文化祭実行委員会／第9回大分県民芸術文化祭地域文化行事

協賛:アサヒビール株式会社／B-Con Plaza

後援:大分県／別府市／大分県教育委員会／別府市教育委員会／社団法人企業メセナ協議会／社団法人ツーリズムおおいた／別府市観光協会／特定非営利活動法人大分県芸術文化進行会議／大分合同新聞社／NHK 大分放送局／OBS 大分放送／TOS テレビ大分／OAB 大分朝日放送／エフエム大分／シティ情報おおいた／CTBメディア 株式会社

【参加団体/パネリスト】五十音順・敬称略

伊藤京子:別府アルゲリッチ音楽祭 総合プロデューサー

(大分県別府市 クラシック音楽フェスティバル・文化ボランティアの草分け)

北川フラム:大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 総合ディレクター

(新潟県越後妻有。国内で最大規模の芸術祭開催)

熊倉純子:取手アートプロジェクト

(茨城県取手市 大学・自治体・市民がパートナーを組む)

立木祥一郎:NPO 法人 harappa 理事／AtoZ展開催実行委員会

(青森県弘前市 市民主導型の美術展のべ13,000人のボランティアが関わる)

【モデレーター】

荻原康子:社団法人 企業メセナ協議会 シニアプログラムオフィサー



結果・成果

県内からの参加者が多く、地域でまちおこしをしている団体やアートスペースを運営している方、また大分県や別府市など行政の方も多く参加されました。特に別府市内でボランティアやまちおこしをしている地元の方や大学生の参加が多くみられました。

交流会では別府名物の石垣餅やおやつとドリンクを楽しみながら、講師の方々と参加者が積極的に交流し、これからの文化ボランティアのあり方や大型文化フェスティバル開催への相談など活発な意見交換を行いました。



また2009年に行われる国際現代芸術フェスティバルに関して、別府市からの多大な支持と協力を得て実現の方向に進みつつあり、市民から立ち上がったフェスティバル開催の運動が、行政を巻き込んで実現に向けて動いている点は、本事業の成果として大きいと思います。

【所属】計:83人

学生 22 / 教育関係 7 / NPO 18 / 企業 7 / 行政 10 / その他 19

〈アンケート回収〉

A(とてもあてはまる) / B(あてはまる) / C(少しあてはまる) / D(あてはまらない)

【このイベントに来てよかったと思う】

A 10 / B 4 / C 0 / D 0

【新しい発見があった】

A 8 / B 3 / C 2

問題点

問題点として以下の点が挙げられます。

- ・当初の予定より入場者数が少なかった
- ・実際に文化ボランティアとして活動している市民の参加が少なかった

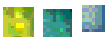
課題

本事業を通して、地方において「文化ボランティア」が浸透していないと実感しました。すでにNPOやボランティアに参加してことがある人や参加している人に対しての告知を行き届かせることが最も必要で、ジャンルに関わらず、そのような人々を把握する必要があります。

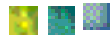
また、文化ボランティアを経験していない人にも具体的な事例を交えて分かりやすく解説し、興味をもってもらうためにも、今後は大型文化ボランティア団体の代表者だけでなく、現場で活動している文化ボランティアの方々に現場の話をしてもらう必要性を感じました。

今後は文化ボランティアの育成や普及、またその受け入れ団体の充実が必要だと思いました。

また、行政との連携や支援を得て、市民に対して市民生活における「文化」のあり方や関わり方を様々な方向から提案していき、その必要性や重要性を広く伝えていかなければならないと思いました。同時に文化ボランティア団体の経営の弱さや人材不足も今後の課題としてあげられます。



特定非営利法人 沖縄ハンズオンNPO



■ 主な活動フィールド : 教育・まちづくり
■ 所在地 : 沖縄県沖縄市

団体紹介

青少年の健全育成、起業家人材育成、まちづくり推進を柱に、沖縄県全域で子どもから大人までを対象にハンズオン(見て、触れて、感じる)体験型ワークショップの企画・開発・運営を行っています。



趣旨・目的

まちづくりは人づくりというテーマのもと、沖縄文化の魅力を伝え、発信し、さらに異文化を理解する人材を育成しています。

概要

沖縄の民話発祥の地や、文化発祥の地を訪れ、実際に見て・聞いて・学ぶ体験や公民館・社会教育施設など地域の方々に講師を迎え、幅広い分野のワークショップを行いました。参加者は、沖縄文化に興味のある高校生から一般を対象としました。

- 第1回 歴史編「英語で語る沖縄～読谷Day Trip～」(1日間)
- 第2回 芸能編「沖縄の芸能魂伝承～沖縄さんしん講座～」(2日間)
- 第3回 「沖縄の方言～しまくとぅば～体験講座」(2日間)
- 第4回 「沖縄の昔あそび体験」(2日間)
- 第5回 「国際交流食育英語キャンプ」(2日間)
- 第6回 「おきなわのおやつづくり」(2日間)
- 第7回 国際文化交流編「異文化体験ハロウィンカーニバル」(2日間)
- 第8回 文化編「英語で民話絵本作りキャンプ」(2日間)むかし遊び伝承学部
- 第9回 「沖縄の自然素材アートワークショップ」(1日間)
- 第10回 「琉球玩具づくり」
- 第11回 「琉球ガラスに触れよう！」(1日間)
- 第12回 「沖縄の文化を学ぼう 地域ガイド養成講座」(5日間)
- 第13回 「沖縄の観光自然を学ぼう 地域ガイド養成講座」(2日間)
- 第14回 「国際交流クッキング フィリピンのフルーツお菓子づくり」

結果・成果

参加人数合計

一般参加者180名・中高校生92名・小学生487名、外国人17名が参加しました。沖縄の文化をテーマにしたイベントと国際文化交流のイベントプログラムをパッケージ化し、募集したところ大勢の参加者に恵まれました。

沖縄文化の再発見

沖縄の文化を再発見できたという対象者の感想、また実際に地域で活躍するボランティアの方々との交流などから、沖縄のよさを伝える人材の育成と普及に貢献できました。

子育て・遊び情報のワンストップサービスの確立

参加者アンケートでは、「どこに行けば、地域のおもしろいプログラムを知ることができるのか？」との意見が多数を占めていました。特に小学生の父母からの意見が多かったです。その場所にいけば、どんなイベントやプログラムなどが、いつ、どこで開催されているかわかる情報配信と同時に受信の総合サービスの確立が必要不可欠だと認識しました。これだけの参加者を集めることに成功した理由の一つに、アナログ情報が果たした役割が大いに関わっていました。例えば、子ども遊びの情報宣伝カーを作成し、これを中高生達が、地域のお店や学校、スーパーなど様々な業種を営む事業所などに配置した結果だといえます。また、地域のローカルラジオへの情報投稿など色々な面での活躍が光っていました。

問題点

遊びと、学びの体験をパッケージにした「子どもマニフェスト」、生涯学習の百貨店と題したLearning Exchange(学びの交換プログラム)をコラボレーションイベントを通して、これから学びたい人のリスト、教えたい人のリスト、このプログラムをサポートしたい人を細かくリスト化した人材バンクの設立が急

務と感じました。その際に必要なものは、運営ガイドラインと人材採用のスタンダードの確立が早急に必要だと実感しました。

課題

活動理念、ビジョン、目標、そして目的を明確化するためのガイドライン作成の必要性

このような活動を続けていくためのキーワードは、やはり「社会性」、「公共性」、「持続性」、「独創性」といった広域的な地域の課題解決に結びつくようなイベントやプログラムを制作・立案することが大切です。つまり地域をキャンパスととらえ、地域の教育力を高めることが大事であり、そして、何より、わけあり、こだわり、その地域でしか提供できないパッケージされた多世代・異世代プログラムの構築をさらに推進すべきことを提案し、プログラムにおもしろいネーミングをつけるなど、人に興味を抱かせる戦術が必要です。



課題(続き)

例

こども株式会社設立(社長・株主募集！)

以下の活動プログラムでの組織体制(目的型のチーム編成)

沖縄おばあの知恵袋プロジェクト

沖縄伝統文化継承ワークショップの開催

草刈る正雄隊結成！～ヤギのレンタルサービス付～

都市化で人口が少なくなった地域や独居老人の家で実施するヤギと環境にもやさしいプログラム

独居老人孤独死撲滅計画～花の養子縁組プログラム～

リサイクルペットボトルプランターを作成し、花の苗を地域に配布、花が咲いたらそれを一人暮らしの老人タクに設置してもらい命を救うプログラム。水掛は公民館で活動する子どもたちが当番で出勤役割分担

命の食べ方・終え方プログラム

親子で一つの動物の命が殺傷処分され、スーパーに陳列されるまでの過程を学ぶ生きることに感謝するプログラム

Save A Pet／介助犬養成！夏休みペットケアキャンプ

ペットケアマネジャーや動物愛護センターの獣医さんと連携したペットを捨てないようにし、しつけ学ぶプログラム 対象:ひきこもり、不登校の児童生徒たち

得意技18番放課後学校、公園派遣プログラム

小学生からおじいちゃん、おばあちゃんまで、資格の有無に関わらず、気軽に自分の得意技を披露するプログラム。

こども大学～地域キャンパス構想～

こどもハローワーク(地域お仕事情報ボード)を作成し、こども達が目的をしるした調査ポートフォリオを携え、近隣企業に職場体験(3時間～5時間)を行うショートプログラム。企業には職場としてではなく、体験を提供する学校になってもらう。商品の製造から販売までを実際に体験する

こども村(1年かの活動の成果を披露するイベント)

実際に今年までに2回開催し、毎年3000名を動員するこどもにとっての自主ビッグイベント事業。こども株式会社を設立し、日頃体験活動でお世話になっている企業を訪問し、ブース設置の依頼をします。警察や消防などの公共機関も参加する沖縄版遊びのテーマパーク。

人材バンクなどを構築しても、その人たちを活かし、コーディネートする人材が必要なため運営のノウハウ、企画のノウハウを兼ね備える人材育成プログラムが必要です。

＜温故知新から温故知縁への関係構築へ＞

一般参加者から、このような多くのプログラムやイベントに最初から参加し常連スタッフになった方々、特に定年を迎え、これから地域貢献や次世代の人材育成に関心をもつアクティブなシニアの活躍に期待がもてる結果になったといえます。

この年齢層も同様に、地域でどんなイベントがあり、どこに行けばこのような情報を獲得でき、容易に参加できるかの情報集積地、または居場所づくり、つまり生涯学習に繋がるワンストップサービスの拠点づくりが必要と思います。

最後に、これからのこどもたちや若者たちにとっては、自分たちの地域の課題を遊びながら、学びながら社会を知ることが大切であり、将来、地域の問題を解決に導く意味のある仕事を起こして欲しいと願っています。

つまりこれからのこどもたちが、デジタル化でグローバル化したグローバルスタンダードに準じた世界を目指す前に、自分たちの足元にあるローカルスタンダードをしっかりと認識できるような地域社会の形成に、多世代・異世代で取り組んでいくことこそ、地域人材バンクの真のブランド化につながると期待しています。



文化ボランティア実践事例集

平成19年度
委嘱事業

